

劇場をつくるラボ

福祉施設

シニア
地域
演劇



劇

音楽

職員向け

事例集とコラム

障害と表現にまつわる

当事者研究

祭や芸能

ワークショップ

つく

公演

劇場

人材育成



本

学校

国際交流
プロ
ないもの
の

絵画

共遊

ダンス

ラップ

共生

非言語

現代アート

こども



公益財団法人
森村豊明会

目次

はじめに P.2

劇場をつくるラボとは? P.3

劇場をつくるラボ2025 P.8

劇場をつくるラボ2025 プログラム一覧 ... P.8

【開催レポート①】 P.10
地域の劇場を起点に考える、インクルーシブなプログラム

【開催レポート②】 P.12
「ともに学ぶ教育」を文化芸術から考える

【開催レポート③】 P.14
福祉施設で重度の障害のあるメンバーと身体表現にとりくむ

【寄稿コラム】

野村政之(信州アーツカウンシル)・・・ P.18

「インクルーシブな社会に向けて～施設から地域へ/
プログラムから社会関係へ」

日々の表現が生まれたとき

～エピソード集～ P.20

「がんばらない」と書いてほしいなあ P.21

トイレ介助が一番のお稽古場 P.22

アーティストと出会うことで普段とは違う

関係性が立ち上がる P.23

用務員になっても良かったらいい P.24

「僕の部屋は～」 P.25

いっしょに描くともっと素敵に P.26

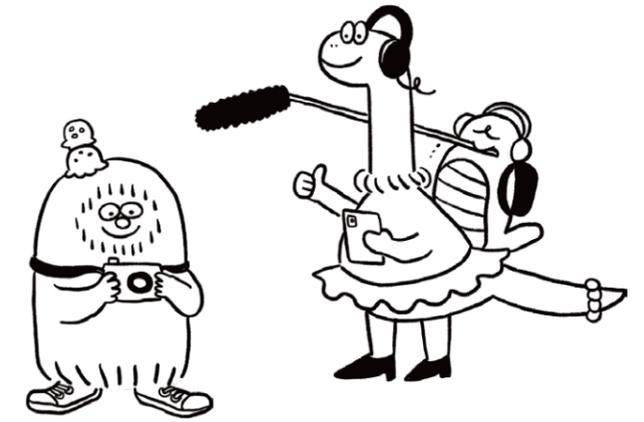
出鱈目語のワークショップ! P.27

思った通りのピロピロ大合唱! P.28

「私、『お仕事』してきたの。すごいでしょ?」・・・ P.29

シャワ!シャワ! P.30

お、さ、な、な、じ、み P.31



【寄稿コラム】森田かずよ(俳優/ダンサー)・・・ P.32

「日本における障害のあるアーティストの活動と課題」

身体と表現～全国の9の事例集～ P.34

出前アートワークショップ/モーソー会議(関孝之) P.35

クロスプレイ東松山(武田奈都子、藤原顕太) P.36

アライタさんとスズキズとそこにいる・あるという表現を感じて
考えるトーク&ミニワークショップ(遠藤暁子、武田和恵)・・・ P.37

劇というきき方(中島裕子) P.38

ひるのダンスと共創の舞踊劇

「だんだんたんぼに夜明かしカエル」(佐久間新) P.39

コンテンポラリーダンスカンパニー「Mi-Mi-Bi」(森田かずよ)・・・ P.40

ASIAS(エイジアス: Artist's Studio In A School)(中西麻友)・・・ P.41

世田谷区下馬地区の「極楽フェス」(恵志美奈子) P.42

りっかりっかフェスタ(国際児童・青少年演劇

フェスティバルおきなわ)(下山久) P.43

【寄稿コラム】

鈴木励滋(生活介護事業所従事者/演劇ライター)・・・ P.44

「死ぬのが怖かった少年がいかにして生きることの美しさを知るに至ったのか」

Q&A どうやってはじめる、なにからはじめる?・・・ P.46

全国の連携パートナー P.50

おわりに P.52

5つのコンテンツ

● 劇場をつくるラボって何? P.3

劇場をつくるラボってなに?

2021年度から2025年度までの劇つくの歩み。プロジェクトのプロセスと運営担当者の気づきや変化についてご紹介します。

● 表現って何?これって表現?何が表現? とまよったら P.20

日々の表現が生まれたとき エピソード集

福祉施設、教育の現場、劇場。演劇、音楽、ダンス…といったジャンルがないときも。現場の人たちがそっと見つけた、魅力的な身体の表現のエピソードを教えてくださいました。

● 何からはじめよう? 事例が知りたい!と思ったら P.34

身体と表現~全国の9の事例集~

ワークショップ、発表、研究、参加の場づくり…。9つのプロジェクト担当者に、事業のすすめ方やプロセス、変化を聞いてみました。

● この人は、今、何を考えている?

寄稿コラム

3人の専門家、実践者に障害や表現、芸術文化について書いていただきました。

野村 政之 …… P.18

森田かずよ …… P.32

鈴木励滋 …… P.44

● みんなの課題や悩みから考える、 プログラム設計の視点 P.46

Q&A どうやってはじめる、なにからはじめる?

よくある悩みや質問についてまとめました。

劇場をつくるラボから生まれた、

げきつくぼん (劇つく本)

「劇場をつくるラボ(以下、劇つく)」は、一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL 主催、株式会社 precog (THEATRE for ALL 事務局) が企画制作をおこなう研究事業です。重度の障害を含め、障害のある人の芸術文化の場への参加にどのような課題があるのか、どのように取り組んでいけばいいのかを考える活動として、2021年2月に始動しました。

本書(劇つく本)は、劇つくの5年間の歩みをまとめ、多様な人たちと身体と表現の活動をはじめていきたい人たちとともに、「プログラムをデザインすること」について考えるガイドブックです。

どこから読みはじめても大丈夫です。気になったところからぜひ、ご覧ください。

劇場をつくるラボとは?

なぜ「劇場をつくるラボ」がはじまったのか? THEATRE for ALL と劇つくのこと

「劇場をつくるラボ(以下、劇つく)」は、一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL 主催、株式会社 precog (以下、プリコグ) が運営する研究事業で、THEATRE for ALL というメディアの立ち上げをきっかけにはじまった。THEATRE for ALL というのは、バリアフリー字幕や音声ガイド、手話などの情報保障や翻訳がついた映像や読み物を配信しているアクセシビリティに特化した WEB メディアである。このメディアの立ち上げにあたって、障害当事者や当事者団体、専門家にご協力をいただいて、設計のための聞き取り調査をしていた。

「障害のある人も自分のペースで好きなときに、好きな場所からアクセスできるオンラインの劇場を開設したいんですが、そういうものがあつたら使っていただけますか?」と、ある福祉施設のスタッフの方にお聞きしたときに返ってきたのは「そもそも、うちの福祉施設を利用してきている重度の障

害のある人たちは劇場に行けないし、なじみもないので、そのサービスがあってもピンとこないですね」というフィードバックだった。

そこで、THEATRE for ALL の立ち上げに関わっていたチームの中で、劇場自体を福祉施設の中に届けるような活動ができないか、という話が生まれ、中心メンバーのひとりだった建築家・アーティストの山川陸さんを中心として、劇つくの活動をスタートさせた。

さまざまな障害のある人は、実際どのように映像や作品を鑑賞しているのか、また、そもそも視聴にあたってどのような障害(バリア)が発生しているのかを知ることは、配信メディアとしても重要なことである。そもそも福祉施設に行ったことがなかったメンバーも多く、いろんなことがはじめてで、手探りだった私たちのプロジェクトを、福祉施設のみなさんは本当に丁寧に、やさしく迎えてくださった。

劇場をつくるラボ

2021

全国の福祉施設に視聴環境・体験を届ける プロジェクトの企画・運営 2021年2月~2022年3月



建築家、セノグラファー、美術家・音楽家と考える、 福祉施設の中の劇場

2021年度は、建築家の山川陸さんをディレクターに迎え、舞台芸術や空間づくりの視点を活かし、福祉施設内に映像を視聴するための環境を整えることになった。環境をつくることで、どのように作品鑑賞の可能性が広がるのか、生活の中でアートと接する機会が増えるのかを検証する実証実験である。

奈良県の福祉施設「たんぼの家」にご協力いただき、建築家の板坂留五さん、セノグラファー・建築家の渡辺瑞帆さん、美術家・音楽家の梅原徹さんとともにプロジェクトをすすめていった。



映像作品上映キットをつくらう!

「そもそも福祉施設で映像作品を上映する環境や機材を整えること自体にハードルがある」「座って長時間の映像鑑賞を行うことが現実的でない人もいる」といった声を受け、映像作品を視聴するための音響・上映機材や小物、それらを活用するためのアイデアを考えることとした。プロジェクトメンバーが施設を訪問したり、オンラインで意見交換を重ねながら、たんぼの家のメンバー(利用者)が楽しめそうな視聴アイデアを、クリエイターを中心に出していった。

出されたアイデアは、実際に試し、感想や意見を得ながらアップデートを行った。その上で、全国の福祉施設に視聴環境やツールキットを届け、行脚することとした。



鑑賞方法の実験

たとえば、身体の麻痺により視線が下を向いている人が通りがかりに作品を見られるよう床にプロジェクションを行ったり、一人で落ち着いて鑑賞できる簡易的な個別鑑賞ブースをつくれる機材を用意したり、抱き枕型の振動スピーカーを用意したり、多様な工夫が生まれた。そして、施設スタッフの協力を得ながら、多くのアイデアを試行していった。2021年2月には、奈良県の社会福祉法人わたぼうしの会「たんぼの家」の協力を得て、活動を開始。2021年3月から5月には、より多くの施設でトライアルを継続するためにクラウドファンディングを行い、その支援をもとに、2021年7月から2022年2月にかけて、岡山県の就労継続支援B型事業所「ぬかつくるとこ」、東京都の「社会福祉法人愛成会」、滋賀県の社会福祉法人やまなみ会「やまなみ工房」、福島県の「社会福祉法人安積愛育園」の計4団体とトライアルを実施した。福祉施設のスタッフとともに意見交換や議論を行い、各施設の空間や利用者の特性に即した視聴環境のあり方を考察した。

映像作品上映キットはつくれなかったけれど

リサーチを経て明らかになったのは、一律のツールキットとして展開することは難しいという点である。全国どこにでも導入できるキットの作成は実現しなかったが、そこで暮らす人々やその場の特性に出会い、多様な上映実験を行う中で、「劇場」や「鑑賞体験」そのものを根本から考える貴重な機会を得ることができた。

この年度に寄せられたフィードバックのひとつに、「そもそも長時間の映像作品を鑑賞することが難しい」「鑑賞できる作品自体が少ない」という声があった。この指摘が、「劇つく」の次なる研究課題へとつながっていった。



ご協力いただいた福祉施設

- 2021年2月
社会福祉法人わたぼうしの会「たんぼの家」
- 2021年8月10日~19日
岡山県:株式会社ぬか(ぬかつくるとこ/アトリエぬかごっこ)
- 2021年11月9日~19日
東京都:社会福祉法人愛成会(愛生会メイプルガーデン)
- 2021年11月11日~11月25日
滋賀県:社会福祉法人やまなみ会(やまなみ工房)
- 2022年1月14日~2月17日
福島県:社会福祉法人安積愛育園
(多機能支援センターピーポ/はじまりの美術館)

劇場をつくるラボ

2022

福祉施設でのワークショップから生まれたアニメーション 『PAPER?/かみ?』上映会

2022年8月~2023年2月

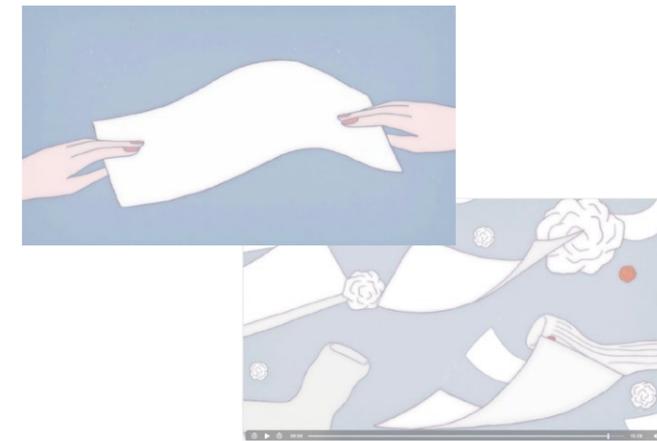


知的・発達障害のある人も一緒に楽しめる映像作品とはどういうものか?

2022年度は、初年度となる2021年度の活動を通じて明らかになった「知的・発達障害のある人を鑑賞者として想定した作品が少ない」という課題を出発点として、オリジナルアニメーションの制作がはじまった。

2022年度のプロジェクトには、新たに音楽家の蓮沼執太さんと映像作家の水尻自子さんが加わり、前年度に引き続き、音楽家の梅原徹さんも参加した。アーティストは福祉施設を訪問し、作品制作に先立って2022年8月に職員や施設利用者とともにワークショップに取り組んだ。そこから、鑑賞環境や、そこで出会った障害のある人の興味関心、日常生活の風景や音を踏まえた、障害当事者も介助者も、子どもも大人も、誰もがともに時間を過ごすことを目指したアニメーション作品『PAPER?/かみ?』が生まれた。

また、作品制作にあたり、アーティストが障害当事者との共創や協働に



ついて理解を深める機会として、芸術文化と社会福祉の専門家である長津結一郎さんと、劇つくプロジェクト2022の参加メンバー全員によるオンラインワークショップも実施した。



各施設等の特性に合わせた上映会・ワークショップの企画・運営

「PAPER?／かみ?」完成後は、同作を使った上映会・ワークショップを全国6ヶ所の福祉施設などで実施。施設や利用者ごとに特性があるため、完成されたプログラムを巡回するのではなく、会場ごとに施設職員の方と話し合いながら、最適なかたちにカスタマイズしていった。

上映場所	実施日
印旛福祉会 いんば学舎・陣屋(千葉)	2022年10月28日(金)
たんぼの家アートセンターHANA(奈良)	2023年1月7日(土)
ほっちのロッジお出かけDAY!(長野)	2023年1月21日(土)
愛成会 メイプルガーデン(東京)	2023年3月17日(金)
まるっとみんなで映画祭2022 in NASU(栃木)	2022年11月5日(土)
NPO法人リベルテ(長野)	2023年2月25日(土)、26日(日)

上映やワークショップの方法についても、固定されたプログラムを提供するのではなく、利用者の障害の度合いや種類、さらにはヒアリングを通じて得られた施設の日常の様子などを踏まえて検討していった。ヒアリングにおいては、施設で利用者が楽しんでいる時間や不足している活動、さらには施設職員の日常からの発見や課題意識を伺った。

日常の音で遊ぶことをワークショップに加えてみたら?

アニメーションに出てくるモチーフは、紙、ティッシュペーパー、コップの水、靴下、おにぎりなど、施設利用者にとって馴染み深いモチーフを選定した。

日常生活の中でよく目にするものを登場させることで、ワークショップ実施時に「こんな音ではないか」と考えるきっかけをつくりやすくすることを意識した。映像をただ座って鑑賞するだけでなく、ものを使う、音を出すといったワークショップの内容は、結果として子どもを対象としたプログラムにも応用可能なものとなった。

2022年度の上映会・ワークショップの成果は記録集としてまとめられ、蓄積されたノウハウは他の施設でも広く活用可能なかたちで公開している。公開された手法は、今回の「PAPER?／かみ?」に限らず、他のアニメーション映像などにも応用できる内容となっている。



上映会・ワークショップ実施のヒント集作成

2022年度の事業で実施した内容は報告書としてまとめ、公開している。この報告書は、各地での上映会・ワークショップの実施事例を整理した記録であると同時に、全国の福祉施設がそれぞれ上映会やワークショップを企画・運営する際のヒント集となることを意図して作成したものである。

この年の成果を踏まえ、翌年度も「参加できる上映会・ワークショップ」の可能性を探究していくこととなった。

劇場をつくるラボ 2023-24

音で遊べるワークショップ型上映会

2023年5月～2024年3月



音で遊べるワークショップ型上映会をつくる

2023年度は、障害のある人がより参加しやすい映像鑑賞体験とワークショップのデザインに着目。たんぼの家アートセンターHANAの佐藤拓道さん、ワークショップデザイナーの栗田結夏さんとともに、ワークショップの開発に取り組んだ。

その結果として、2022年度に制作したアニメーション作品「PAPER?／かみ?」、ノンバーバルで楽しめるチェコアニメーション『Fruits of Clouds』、怪獣映画「大怪獣ブゴン」などの映像作品を鑑賞しながら、声や身体、身の回りのものを使って作品に音をつけて鑑賞する「音で遊べるワークショップ型上映会」が生まれた。



ワークショップの雛形開発のプロセス

個々の施設の課題に応じてワークショップをコーディネートするため、福祉施設へのヒアリングから事業を開始した。能動的な鑑賞を前提としたアニメーション作品「PAPER?／かみ?」がどのような作品であるかを施設職員に伝えたくて、各施設の課題に対して、こうしたプログラムがどのように役立つ可能性があるかをヒアリングした。施設スタッフからは、「施設でアート活動を実施しているがマンネリ化しているため表現の幅を広げたい」「職員が忙しいため、限られた時間内で施設利用者の創造性を広げるために何が出来るかを考えたい」といった

意見が寄せられた。

長野県軽井沢町にある社会福祉法人育護会「浅間学園」の協力を得て、ヒアリングをもとに組み立てたプロトタイプバージョンのプログラムを同施設内で2日間実施した。それをブラッシュアップしたものを基本型として、各実施会場へ展開していった。

プロトタイプをさらに広げて実証実験

その後、長野県軽井沢町の軽井沢町保健福祉複合施設「木もれ陽の里」と、埼玉県の社会福祉法人みぬま福祉会「川口太陽の家」の2カ所で上映会を実施した。木もれ陽の里では、普段顔を合わせている施設のメンバーだけでなく、外部の方との交流を望む声を踏まえ、町内3カ所の施設から参加者が集まる上映会を実現した。「川口太陽の家」では「鑑賞=じっとして観るものというイメージを変えたい」という意見を受け、実施日の2週間前から施設内で作品鑑賞の機会を設け、上映会への準備を進めた。(※川口太陽の家では準備を進めたものの、コロナウイルス感染拡大により上映会は中止となった。)

また、福祉施設以外でも「まるっとみんなで映画祭2023 in KARUIZAWA」「こびあクラブ+ライト学童保育クラブ」「まるっとみんなで映画祭2024 in KARUIZAWA」にて上映会を実施。障害の有無に関わらず、子どもから大人まで多様な方にご参加いただき、インクルーシブな可能性も見えてきた。

実施した施設の職員からは、「利用者から次回を楽しみにする声が増え、映像鑑賞会であるだけでなく、出会いの場でもある企画なのだと感じた」「この活動をもっと地域に開いて実施してほしい」「普段の支援の中でも思っている以上に擬音を使って利用者ややりとりしているのだと気づきがあった」といった声も寄せられた。

「音で遊べるワークショップ型上映会」は、施設利用者と職員の間新たなコミュニケーションの回路を生む。ともに同じ作品を鑑賞することで、支援する側・される側の立場が取り払われ、また音を出すことによるコミュニケーションが行われることで、普段とは異なるかたちでの関係性が生まれた。参加した職員からは、「利用者の新たな一面を発見する機会になった」という声も挙がった。

劇場を つくるラボ 2025 in 長野より

2025年(2024年度)は、長野県を舞台として、ワークショップ企画者に向けた3つのプログラムを企画しました。「地域の劇場」「教育の現場」「福祉施設」で創作や発表、鑑賞などに参加するプログラムをどのように設計していけるのかを考えました。



プログラム 1

地域の劇場を起点に考える、 インクルーシブなプログラム

劇場や文化施設をどのように「ひらく」のか

Date | 7月13日(日)13:00-18:00 | サントミュージゼ多目的ホール

劇場など地域の文化的拠点で、多様な地域の人にひらかれたインクルーシブなプログラムを実施してきた団体や劇場プロデューサー、アーティストをお招きした座談会とイギリスのカンパニー Paragon のメンバーによる「障害のある人とのダンスワークショップを企画する人のためのダンスワークショップ」を行いました。

ゲスト

Paragon

スコットランドを拠点に、音楽とダンスを通じてすべての人に創造の場を提供する芸術団体。世界各地でパフォーマンスやワークショップを行い、障害のある人の自己表現と社会参加を支援する。



Ninian Perry (クリエイティブ・ディレクター兼 CEO)

Paragon 創設メンバーであり、インクルーシブ音楽を軸に世界各国で7500名を超えるパートナーと創作。メキシコ、インド、イタリアの障害者団体と連携し、学際的な事業を手がける。



アライカリユ 晶子 (Paragon ダンス・プラクティショナー)

NYでコンテンポラリーダンサーとして活動。帰国後、「クリエイティブ・ムーブメント」を軸としたカリキュラムの開発や指導など、教育や創作の現場で広くインクルーシブダンスを実践する。

恵志美奈子

(世田谷パブリックシアター劇場部 創造環境開発担当)

世田谷区下馬地区の福祉法人等とともに、都営下馬アパートを会場に、地域コミュニティの多様性や他者を知ることを目的にしたアートフェスティバル「極楽フェス」(2021年~)を立ち上げ。



森田かずよ (俳優・ダンサー)

先天性の障害を持って生まれる。自身の身体と向き合いながら、表現の可能性を続ける。「PerformanceForAllPeople.CONVEY」主宰。演劇・ダンスの領域を超えて国内外の多数の公演に出演。東京パラリンピック開会式ソロダンサー。



プログラム 2

「ともに学ぶ教育」を文化芸術から考える

「副学籍」をキーワードに、教育現場での プログラムづくりについて対話する

Date | 7月27日(日)10:30-16:30 | 佐久平交流センター 音楽室

特別支援学校に通う児童生徒が自宅近くの小中学校にも籍を置き、地域の一員として学び合う「副学籍」で、どんな授業をすればいいのか。佐久市出身の楽器インターフェース研究者、障害のある人たちとダンスをしてきた経験のある佐久市在住ダンサーにそれぞれヒントをもらいつつ、伊那養護学校 特別支援教育コーディネーターと、文化芸術と学校現場をつなげる取り組みを行っている実践者、インクルーシブ教育の専門家を交えて考えました。

ゲスト

金箱淳一 (楽器インターフェース研究者)

玩具会社、美大助手を経て、神戸芸術工科大学准教授。障がいの有無を問わず音楽を楽しむための「共遊楽器」を研究。旧浅科村出身。



伊達麻衣子&竹田栄次 (コンテンポラリーダンサー)

佐久市望月在住。それぞれドイツの Theater Thikwa、SZENE 2WEI で障害のある人とともにダンスをした経験がある。



中西麻友 (NPO法人芸術家と子どもたち事務局長)

小学校教諭、イギリス留学を経て「芸術家と子どもたち」に入職。教育現場や児童福祉施設等でのワークショップをコーディネートしている。



塩入健

(伊那養護学校 特別支援教育コーディネーター)

小・中学部すべての児童生徒に副学籍がある伊那養護学校で副学籍を含めた地域化推進を担う。前任の伊那北小学校では、副学籍の受け入れ側として尽力した。



野口晃菜 (インクルージョン研究者)

小学校講師、株式会社 LITALICO 研究所長を経て、一般社団法人 UNIVA 理事。学校、教育委員会、企業などと共にインクルージョンの実現を目指す。



プログラム 3

福祉施設で重度の障害のあるメンバーと 身体表現にとりくむ

生活の中にある、ゆたかな、日々の表現

Date | 8月23日(土)11:00-16:00 | 佐久市生涯学習センター

福祉施設で身体表現のプログラムを実施するには? 福祉施設の運営スタッフとしてさまざまな表現活動に取り組む実践者のトークに加え、長年、重度の障害のあるメンバーとともに、演劇の活動を行っているたんぼぼの家の佐藤拓道さんと HANAPLAY のメンバーをお招きして、参加者に向けた演劇のワークショップを行いました。

ゲスト

HANA PLAY

たんぼぼの家アートセンター HANA で行っている演劇プログラム。毎週火曜日、10名ほどのメンバーと演劇創作を行っている。昔話をもとにした作品や即興演劇、近年ではメンバーそれぞれの経験談をもとにした作品も創作している。その他、メンバーが登壇して講演を行ったり、演劇プログラムの手法を用いたワークショップも行なっている。



藤原佳奈 (戯曲作家・演出家)

「松のにわ」代表。わたしたちの〈はたらき〉を聴き、再編し、上演の場をひらく。人が集い言葉を交わす場をひらきながら、現代における上演を問い直している。



佐藤拓道 (〈たんぼぼの家アートセンター HANA〉副施設長)

障害のあるメンバーのケアに携わりつつ、俳優としても活動。また、たんぼぼの家では「HANA PLAY」と題した演劇プログラムを担当し、障害のあるメンバーの暮らしや人生の経験に基づいたオリジナルの演劇作品を創作。さまざまな場所で公演を行っている。そのほかにも施設外での演劇ワークショップ、講演なども行なっている。



原田修 (浅間学園施設長)

2011年より障害福祉に従事。人間が生きる理由について入所者とともに考え、意味よりも感性を重視した支援を模索する。あさまバンド、焚火の会、スペシャルオリンピックス等を通じて、共生社会の実現に取り組んでいる。



プログラム
1

劇場や文化施設をどのように「ひらく」のか 開催レポート

(2025年7月13日・サントミュージゼ)

プログラムについて

2024年4月1日に改正障害者差別解消法が施行され、民間の事業者にも合理的配慮が義務化された。これまで障害のある人に対するアクセシビリティに取り組めていなかった事業者も含めて、なにかしらはじめようとしているところが多い中で、インクルーシブな活動やアクセシビリティに正解はない。劇場や芸術文化関係者から「予算も体制もそれぞれに事情がある中で、どんな風にこのことに向き合っていけるのだろうか?」という不安の声が聞こえてくることもある。そもそも「芸術文化や劇場を(多様な人に)ひらく」ってなんなんだろう? 「ひらくことでなにが起こるんだろう?」ということを問いとしてはじまった初回。第一線で活動される経験豊かなゲスト講師の方々に加え、参加者の皆さんも企画者、アーティスト、福祉施設のスタッフなど、自分のフィールドですでにさまざまな活動をされている方が多く、実践者同士がともに、頭も身体も動かしながら考える場となった。(プログラム①企画担当:篠田栞)



当日の流れ

- はじめに
- アライカリュウ晶子さんによるダンスワークショップ事例共有
- ①Ninian Perry さん(Paragon 共同創設者)
- ②森田かずよさん(俳優・ダンサー)
- ③恵志美奈子さん(世田谷パブリックシアター)
- おわりに

それぞれのダンスのひきだし方

講師 アライカリュウ晶子さん(Paragon)

この日は、「クリエイティブ・ムーブメント」を軸にしたワークショップからスタート。教育や創作の現場でインクルーシブダンスを実践してきたアライカリュウ晶子さんはスコットランドの Paragon というカンパニーで活動している。「クリエイティブ・ムーブメント」とは、個々の動きを引き出し、その人自身が動きをつくることをサポートする手法である。今回は Paragon が実際に障害のあるダンサーと行っている創作プロセスを3時間にわたってシェアしてもらった。「Paragon の活動は、すべてがインビテーション(招待)です」と晶子さん。「途中で出てもいいし、またやりたくなったら入ってきてもいい。自分のペースで参加してください」と伝えた。身体を意識するための「ストレッチ」、「ミラーリング」の手法などを用いて自分の身体の中から出てくる動きを再発見していくワーク、他者と身体を観察しあい、協働することで、互いの動きを発展させていくようなワーク、パートナーの動きを支える

体験。参加者は「それぞれの身体」「それぞれのチーム」によるダンスが生まれていく過程を体感した。与えられた振付ではなく、ひとりひとりの内側から引き出された動きが重なって、ダンスとなっていく様子が印象的だった。



障害のある人が芸術教育を受ける機会をつくる

講師 Ninian Perry さん(Paragon)

後半は「場をひらくこと」というテーマのトークセッション。ひとり目の登壇者は、スコットランドのアートカンパニー Paragon の共同創設者・Ninian Perry さん。Paragon は音楽を軸に、障害のある人との創作・教育・国際協働をスタートさせた団体。クラシック音楽の活動が、やがて障害のある子どもとの創作や、ダンス、コミュニティとの協働へと発展し、イギリス国内のみならず、インド、メキシコ、イタリアなど、これまで7500人以上と創作を行ってきた。

障害のある場から当たり前をゆさぶる

講師 森田かずよさん(俳優・ダンサー)

俳優・ダンサーとして活動する森田さんは、国内外の公演、テレビなどのメディアにも多数出演し、2021年には東京パラリンピック開会式のソロダンサーとしても注目を集めた。2025年現在は大阪大学人文学研究科博士後期課程に在籍。障害のある人のダンスに関する研究にも取り組み、執筆、大学や福祉施設での講師など多岐にわたる活動を行う。「大阪府障がい者舞台芸術オープンカレッジ」では、100名を超える参加者の約8割が精神・知的障害のある方々。森田さんは、カレッジでの活動を通じて、さまざまな視点を得たという。「創造的な伴走者を育てることが大事で、それに時間がかかるということ」「振り付けを覚えることがダンスなのか?セリフを淀みなく話すことが演劇なのか?」「セリフが苦手な男性から言葉が出てこないことで生まれる独特のリズムが心地よかったりする」…講師やスタッフ側が「演劇」「ダンス」とは何なのかを考えさせられる瞬間がある。「みんなでダンス in Ibaraki」は、5歳から95歳までが参加する活動。地域の人

劇場は広場である

講師 恵志美奈子さん(世田谷パブリックシアター)

“公共劇場の果たすべき役割とは何か”。そのことを考えるとき、恵志さんは、世田谷パブリックシアターの入り口に掲げられている詩の一文“劇場は広場である”、にいつも立ち返ってきたという。「現実社会では、人は似た価値観や背景を持つ者同士が集まりがちだからこそ、多様な人々が交わる“広場”が意図的につくられる必要があると考えてきた。」そうしたインクルーシブな場は、劇場が、実際に人が集まるといった特性を持つからこそ、特に果たせる役割であると恵志さんは考えている。また「誰でも参加可能」とするワークショップはたくさんあるものの、その多くでは、誰もが来る場を本当に想定していないのではないかと問う。「例えば、言葉によるディスカッションを前提とした企画で“誰でも”としていても、知的障害のあ

障害のある人との活動に重点を置くようになったのは、「障害のある人が高等教育、とりわけ芸術教育を受ける機会が非常に限られていることに気がついたから」とニニアンさん。Paragon では、障害のある人がそれぞれのペースでトレーニングを重ねながら、自らの表現をパフォーマンスとして発表する。音楽とダンスの両方の専門家・実践者が入り、一人ひとりの創造性を高めることをサポートする。コミュニティ・アートの組織として、地域との協働やアーティストの育成にも力を入れている。

を巻き込みながら、ドキュメンタリー制作やファッションショーにも発展。森田さんは、このプロジェクトに関わるうちに「障害のある・なし」ではなく、「振付を覚えるのがゆっくりな〇〇さん」というように、それぞれの人そのものを見るようになったという。95歳の参加者には「これまでの人生を踊る」というテーマで、人生の波を絵に描いてもらい、そこから振り付けをつくり、踊ってもらった。最近では年齢層の多様化に伴い、看護師を配置。安全性とのバランスや、公的劇場のプロジェクトとしての責任の範囲など、難しい部分もあると語る。神戸・新長田を拠点とする Mi-Mi-Bi は、「生活や社会に障害を感じる人々のダンスカンパニー」で、森田さん含め、障害のあるメンバーもないメンバーも含めて、現在5名が在籍。「美しさとは何か?対称性、均整がとれるものだけが美なのか? 私たちの中にある美しさをどう見るか?」ということに向き合いながら活動を続ける。活動を続ける中で、“当たり前”が通用しないことが多々ある。自らの創作、活動を通して森田さん自身も「私は一体何者なのかを問い続けている」という。

る方にとっては必ずしも居心地が良いとはいえない。”誰でも”ととりあえず言って済ますのではなく、ちゃんと参加しにくい人がいることを認識して、今回の自分の企画には参加しにくい人がいる、だから次はその人たちが参加しやすい企画をつくろうと考えることが大事なんじゃないか」と問いかける。企画者が、無意識に“マジョリティ対マイノリティ”という構図で企画をつくる危うさについては、「たとえば“健常者と障害者で作品をつくる”という言い方が当たり前になれば、それ自体に潜む暴力性に気づく必要がある」と話す。企画者はマジョリティ側に属する人が多い。まず、企画者が、自分の中の偏見を認め、自分の企画が誰かを排除せざるを得ない状況を作っているということに自覚的になること。そして、対話や実践を通して気づきを共有していくことが大切だと締めくくった。



プログラム
2

「ともに学ぶ教育を文化芸術から考える」 イベント開催レポート

(2025年7月27日・佐久平交流センター)



プログラムについて

ともに学ぶ時間をつくることは大切だけれど、今の学校教育の現場でおこなわれている実践は限定的で、どうしても成果主義・成績主義にとらわれがち。特別支援学校に通う児童生徒が自宅近くの小中学校にも籍を置き、地域の一員として学び合う「副学籍」では、現場の先生が一任されて戸惑うケースも少なくない。

一方、身体表現や非言語のコミュニケーションは、障害の有無を超えて他者と関わる方法として大きな可能性を秘めている。

そこで、副学籍の授業をはじめとして、そもそもどのようにしたら障害の有無を超えて「ともに学ぶ」時間を過ごせるのか、身体表現をはじめとする文化芸術や非言語のコミュニケーションを活用する方法はないのか、考える場をつくることにした。(プログラム②企画担当: ぎこうじるい)

当日の流れ

- はじめに
- 楽器インターフェース研究者・金箱淳一さんによるトーク&ワークショップ
- グループごとに感想シェアと発表
- 伊達麻衣子さん・竹田栄次さんによるダンスパフォーマンス
- 事例共有
 - ① 中西麻友さん(芸術家と子どもたち事務局長)
 - ② 塩入健さん(伊那養護学校特別支援教育コーディネーター)
- おわりに 野口晃菜さん(インクルージョン研究者)

参加してくれた人たち

参加者の背景は実に多様で、下は高校生から上はリタイア世代まで、先生、保護者、アーティスト、福祉職員、議員、学生など…さまざまな立場の面々が集まった。中にはこの日のために大阪からいらしたという方も…!

参加者からは事前に「リソース不足に悩んでいる」「志をともにできる仲間とつながりたい」といった声が多く寄せられた。一方で特別支援学校に在籍しながら副学籍を活用している子どもをもつ保護者からは、「お客さんとして迎えられる副学籍の授業に違和感がある」「副学籍の情報が少なく、他校の事例を知りたい」などといった切実な声もあがった。

「共遊楽器」が提供するもの

講師 金箱淳一さん(楽器インターフェース研究者)

プログラム冒頭では、佐久市出身の楽器インターフェース研究者である金箱淳一さんがトークとワークショップを実施。金箱さんはもともとベースを演奏する音楽の愛好家で、「ともに音を楽しむ」という軸に沿って研究の裾野を広げてきた。

想像したものを試作してみることによって他者と共有する「想像/ソウゾウ」、既存の要素を組み合わせるアイデアを発想し、とにかく実際にやってみる「発想/ハッ、ソウカ!」、そしてアイデアを企画として実現していく「実装」によって分かることがあるという「実装/ジツは、ソウだったのか!」の3つを柱に、研究してきた楽器や道具を紹介した金箱さん。障害の有無にかかわらず、ともに遊べる楽器という意味で金箱さんが命名した

「共遊楽器」をいくつかデモンストレーションしてくれた。

弦がなく、感覚的に演奏できる「マウンテンギター」、振動をお互いに感じられる打楽器「ピブラジョンカホン」、音を振動に変換する「タッチ・ザ・サウンド・ピクニック」などを体験する参加者の表情は、素直に驚きに満ちていた。

トーク後のグループディスカッションでは、「マウンテンギターは知的障害児にとっても楽しめるアイテムなのではないか」という具体的な活用のお話や、「金箱さんの生き方そのものが子どもたちにとって勇気づけられるものである」という意見もあった。さらに、「障害のある人もない人も同じように生きやすい社会をつかっていく」うえで、金箱さんの共遊楽器のようなツールが大きな役割を担っていくのではないかと、この言葉には多くの参加者がうなずいた。



ダンスってこんなに自由

講師 伊達麻衣子さん・竹田栄次さん(コンテンポラリーダンサー)

午後は、佐久市在住のダンサー、伊達麻衣子さんと竹田栄次さん夫妻によるパフォーマンスからスタート。徐々に覚醒していくかのような二人のコミカルな動きと、それに連動するなんとも言えない表情が印象的だった。二人に目を奪われていると、いつのまにか二人が手にするマウンテンギターも“踊り”出し、転調しながら動きとシンクロした。

途中、二人のお子さんが「ママ!」と言いながらフロアに入ってきたけれど、麻衣子さんも栄次さんも動じることなく、麻衣子さんはお子さんを抱き上げて踊り続けた。



異質な他者と出会う上でのアートの役割

講師 中西麻友さん(NPO 法人 芸術家と子どもたち 事務局長)

続いて、教育現場や児童福祉施設などで子どもたちとアーティストをつなぐ活動に取り組む「NPO 法人 芸術家と子どもたち」の事務局長、中西さんからの事例共有。

25年前から活動を開始した同団体は、さまざまな助成金を活用し、自治体とも協働して費用を獲得し、ワークショップを実施したい学校や現場とアーティストをマッチングする。アーティストが入るワークショップでは、双方向でさまざまな関係性が形成され、結果よりもそのプロセスの中で起こることが大事だと中西さんは指摘した。

普段の授業では課題があるとされがちな子どもたちが、ワークショップではアーティストの見本になるということも。わかりやすい成果を確約するものではないものの、特別支援学級の子と通常学級の子が知り合う機会になったり、子どもが関わる複数の施設の交流につながったりもしているという。



今後の教育のあり方につながる副学籍の実践

講師 塩入健さん(伊那養護学校 特別支援教育コーディネーター)

すべての児童・生徒が副学籍(※)を持つ伊那養護学校では、週に1回、保護者の付き添い無しで副学籍教室への登校が実現している。伊那養護学校で地域化推進を担う塩入先生がその経緯を話してくれた。

上伊那圏域で副学籍が普及した背景には、2008年、ある地域の小学校の校舎内に、養護学校の分教室(本校とは違う場所に設置する教室)を開設したことが大きく関係する。同じ場所でもとに過ごすことができる分教室の良さが広まると、数年後に定員を上回る事態になり、これをきっかけにそれぞれの居住地の学校内に養護学校の生徒が定期的に通える教室「副学籍教室」が開設。養護学校の教員が週に1回副学籍教室に向き、自治体によっては給食時に支援員を派遣してもらうなどして支援体制を整えた。最初は理解が得られなかった地域の学校の先生たちも「養護学校の児童・生徒に実際に出会って経験する」ことを通じて、少しずつ理解を広げていったという。そもそも「うちの(地域の)子」

※副次的な学籍について 特別支援学校に通う児童生徒が自宅近くの小中学校にも籍を置き、地域の一員として学び合う制度やその学籍のことを総称して「副次的な学籍」という。自治体によって呼称はさまざまで、長野県では「副学籍」と呼んでいるが、保護者の付き添いが必要であることや認知度不足、現場の教員の負担などの課題がある。

さらに栄次さんは、お子さんを抱く麻衣子さんを軽々と抱き上げ、回転したり体重を預けたり。二人の圧倒的な信頼関係を前に、鑑賞している参加者も次第に安心感に包まれていく。

気がつくと二人の柔らかな誘いに手をとられ、参加者もいつの間にか踊り出していた。男性も女性も、手話通訳者さんも、脳性麻痺のお子さんも、みんなが自然な形で巻き込まれ、マウンテンギターとともにダンスのバトンを渡していくさまは、とても美しい光景だった。

金箱さんのマウンテンギターとのコラボレーションを実現すること、学校の先生たちの授業のヒントを生み出すということの両方を実現するために頭を悩ませてくれたお二人。どちらも最後まで諦めないプロ根性が感じられたパフォーマンスだった。



2024年にコーディネートしたワークショップの実績は、1年間で138校・園・施設、552日に及ぶ。年間日数を遥かに超える実施回数背景には、総合的な学習などが盛り込まれた学習指導要領の改定もある。

コメンテーターとして登壇したインクルージョン研究者の野口晃菜さんは、「異質な他者と出会うことはちょっと大変なことではあるが、本来はワクワクするものですね」としたうえで、「多様な子どもたちが混ざり合う学びをつくっていくためには、画一的な学校での学びをずらしていく必要があり、その上でアートの視点や教員だけではなく多様な人々との関わりが非常に重要だ」とコメントした。

さらに、「これまでは、多様な子どもたちがいると『勉強が遅れちゃう』とか、『良質な学びが得られないのでは』という前提があったけれども、本当にそうなのかを問い直していかなければならないと思います。発達障害のお子さんが発想力があっていろいろなアイデアを出してくれるというお話もありましたが、むしろ多様な人々が暮らす社会で生きていくことを考えると、教室に多様性がないと良質な学びを得られないのではないかと私は考えています」と訴えた。

と考えると、むしろ副学籍教室の方が自然なあり方だった。

分教室や副学籍の現場では、休み時間をはじめとする遊びの共有や、登下校の道のりでの体験が実はとても大事だということ塩入先生。「交流」ではなく、あくまでも同じ地域で「生活をともにする」という意識を大切にしてきた。

インクルージョン研究者の野口さんは、地域の学校に行くこと、その子に合った支援や教育課程を学ぶことが両立できないシステムの問題を指摘。「本来は両方保障するのがインクルーシブ教育であり、上伊那の実践は今のシステムの限界を突破するものだ」とコメントした。

さらに、通常学級の包摂力を上げるべく、5年後に改定予定の学習指導要領では、教育課程のあり方が議論されているという。そのためには「特別支援教育で培ってきた知見を通常学級に活用していく必要がある」とした上で、「上伊那での実践が全国に知られると良い」と語った。

終了後も参加者同士での対話がしばらく続き、「今後もこの地域の副学籍とともに学ぶ教育について立場を超えて語る場がほしい」という声も聞かれた。



プログラム
3「プログラム③福祉施設で重度の障害のあるメンバーと
身体表現にとりくむ」イベント開催レポート

(2025年8月23日・佐久市生涯学習センター)



プログラムについて

オンライン劇場 THEATRE for ALL (株式会社 precog 運営) を立ち上げたとき、福祉施設の職員さんの中に「重度の障害のあるうちの利用者は、そもそも文化芸術から疎外されている。アートとは、関係がもてない」と話して下さった方がいた。あのとき、自分たちの無意識と無自覚を反省し、当時いたメンバーが手探りで立ち上げたのが「劇場をつくるラボ」だった。劇場での鑑賞を前提とした公演、言葉やセリフを前提とした演劇。それだけではない、身体(表現)を軸にした参加や上演の場はつくれるのか? そもそもダンスや演劇といった私たちが頭に浮かべるものだけが身体表現ではない。最終回は「(福祉の現場の) 日常の中から生まれる表現」をひとつのキーワードとして企画した。(プログラム③企画担当: 篠田菜)

当日の流れ

- はじめに
- 事例共有
 - ① 佐藤拓道さん(たんぼぼの家)
 - ② 原田修さん(浅間学園)
 - ③ 藤原佳奈さん(戯曲作家・演出家)
- HANA PLAY メンバーによる演劇の
- ワークショップ
- 感想シェア会/おわりに

自分の中から出てくる表現

講師 佐藤拓道さん(たんぼぼの家)

佐藤さんはたんぼぼの家の演劇チーム、HANA PLAY で現在10名くらいのメンバーと一緒に活動している。自身も俳優として活動し、さまざまな作品に出演してきた。佐藤さんは、幼少期の脳性麻痺によって足に障害がある。ある演劇ワークショップに参加したとき、他の参加者のテンポに合わせて動いていた佐藤さんを見た演出家から「なんで無理をするんだ、その自分の身体を活かして演じなさい」と言われたことがひとつの転機になったという。

佐藤さんが HANA PLAY のディレクターになる前、演劇の活動で昔話を題材にしていた時期があった。あるとき、本番をやり終えたメンバーが、実は物語の内容を理解していないということがわかった。“段取りやセリフを覚えるだけでいいんだろうか?”と疑問に思った佐藤さんは、当時の演出家と話し合った。そこから俳優としてこれまで経験してきた演技の技術やコミュニケーション力を高めるための“シアターゲーム”を取り入れながら、メンバーとやれることを試行錯誤し始めたという。

「息をパスする」というゲームをやってみたら、それがとても面白くやれたんです」そこからさまざまなコミュニケーションのゲームを試していった。他者の動きを真似るミラーリング、ジェスチャー、食事介助をスローモーションでやってみる…。食事介助のスローモーションを試してみたとき、障害のあるメンバーから「普段より食べやすい」と言われて、メンバーが普段、介助者のリズムに合わせて食事を頑張っていたのだと気づかされた。HANA PLAY の演劇のひとつの特徴は、メンバーの経験談から台本がつくられるということ。「初恋の話とか、めちゃくちゃ盛り上がる。メンバーが自分の中の経験話を話すとき、言葉も出るし、話しながら身体もいきいきとよく動くことがわかって、その身体が魅力的だと感じました。それをなんとか使いたい!と思ったんです」と佐藤さん。自分自身の日々の物語を演じるという HANA PLAY の今のスタイルはそうして出来上がった。



ちがうちがう 生きることそのものが表現なのだ!!

講師 原田修さん(浅間学園)

浅間学園の施設長の原田さんは、最初、表現活動を、“レクリエーション”、“暇をつなぐ余暇的なもの”、“活動として半ば強制的に行うもの”にとらえていた。しかし、活動をしていくにつれて、“生きることそのものが表現である”と感じるようになっていったという。「ズンドコ節」に合わせてなんとも軽快に踊る利用者さんの映像を見せながら「これが日常なんです。これで支援者の方が癒される」と話す。表現には、“開かれた表現”と“閉ざされた表現”があるという。外からもわかりやすい自己の発露としての“開かれた表現”に対して、内なる“閉ざされた表現”。内なる表現としては、庭に座り込んで楽しそうに鉄を打ち鳴らす利用者さん、

Re spect よくみるということ、実演家の役割。

講師 藤原佳奈さん(戯曲作家・演出家)

戯曲作家・演出家として活動する藤原佳奈さんは、舞台芸術に関係する人だけではなく、さまざまな人と一緒に上演に向かう活動をしている。松本市の出居番丸西(でいばんまるにし)で毎月実施している「米はある!」という場は、名前通り、米を炊いて用意していて、大人から子どもまで、さまざまな人が集まる。「アートプロジェクトひとひと」は、文化人類学者、精神保健福祉士など多分野で協働しながら、性差や文化によって形づくられてきた人間の身体へのまなざしを分析し、再編を試みるプロジェクト。コロナ禍以降は特に、さまざまな人との協働が増えた。「他者のことって絶対にわからない。分からないんだけど、それでも最大限想像するっていうことが、(上演するときには)大事になってくる」Respect という言葉は「よく(Re)」「みる(spect)」に分けることができる。「尊敬する」というと何か上にみるようなニュアンスを含むけれど、よくみるっていいなと

よくみることができるようになると、些細なものがみえてくる

講師 HANA PLAY(たんぼぼの家)

後半は、HANA PLAY メンバー(佐藤拓道さん、下津圭太郎さん、前田考美さん、行方雄大さん、杉田夏希さん)を講師としたワークショップ。息のキャッチボール、スローモーションなど、普段 HANA PLAY の中で実践されているシアターゲームやコミュニケーションの手法を体験した。

最後は、本事業のアドバイザーであり、長年にわたり障害福祉事業所でアーティストのワークショップを企画してきた鈴木滋彦さんからの総括。ワークショップのすごさは、“日常の中の豊かなものに気づかせてくれること”、“些細なことが



テント内にカラフルな風船がふわふわ舞っている中、静かに喜びを発露させている利用者さんの映像を紹介してくれた。また、浅間学園では音楽が盛んで、作曲家・音楽講師・シンガーソングライターの荻原崇弘さんとのジャンベの活動を続けている。あるとき、メンバーから「カッコいい姿をたくさんの人に見てほしい」という声が上がリ、発表会を企画した。グルーブレッスンを重ねていくうち、職員側が本番を成功させることに目が向いてしまい、「こうすれば綺麗に聞こえるから」「こうやって叩いてね!」とルールを押し付けてしまうようになった。原田さんは、これではいけないと思い、“委ねてつくる表現の世界”に軌道修正をしていったという。「支援者は自らの差別意識とバイアスを認めて、自分自身を疑え。そして支援者である職員がまず思いっきり楽しむこと。表現は、私たちの“中”にある」

思って、よくみてつくられた作品には、リスペクトがある。敬意があるものだと思うんです」と藤原さん。これまで、ろう者の俳優と聴者の俳優との共同企画や、視覚障害のある人も楽しめる空間体験型ゲームの脚本執筆、音声ガイドの執筆などに関わり、自分とは異なる身体を想像する機会に向き合ってきた。「生きている限り、身体の中で渦巻いている感覚、感情はみんな持っている。どんな身体であっても、生きている限りある部分。そこをはいじりとしてやっていきたい」と考えている。「星の王子さま」(2022)では、遠隔コミュニケーションができる分身ロボット「OriHime」のパイロット11名とともに朗読劇を上演した。特別支援学校の先生たちと演劇教材をつくるプロジェクト、障害福祉事業を運営するNPO法人リベルテと、長野県を拠点にともに多様な学びをつくっていくためのコミュニティ「Learn by Creation NAGANO」との協同プロジェクトなどは現在進行中。「いろんな身体の人と一緒に遊べる、真ん中の遊びってなんだろう?」ということを目下、試行錯誤している。



見えるようになってくることだと鈴木さんはいう。「今日みなさんがやっていたことは、今この国の主流な価値観に照らし合わせると“生産性がない”とされるものかもしれません。けれどどうでしょうか。やってみると、なんともいえない幸せな気分になったはずですよ。だからこそ、障害のある人とのワークショップを社会に広めていきたいとわたしは思っています。そうすれば、これまで社会にとって無価値だとされてきたものの見え方が変わり、世界の価値観も変わっていき、最終的には、誰ひとり取り残さない社会につながっていくはずだと思うからです」と締めくくった。





インクルーシブな社会に向けて ～施設から地域へ／プログラムから社会関係へ

寄稿コラムでは、障害とアート分野で活躍する実践者や専門家に、それぞれの立場から障害と身体表現やワークショップを取り巻く環境や実践について、2025年、今まさに考えていることを綴っていただきます。

野村政之

信州アーツカウンシル(一般財団法人長野県文化振興事業団)ゼネラルコーディネーター。1978年生、長野県塩尻市出身。舞台芸術の企画制作・創作現場と、文化行政・地域の芸術文化支援に並行して携わる。公共ホール、東京の小劇場、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京歴史文化財団)アーツアカデミー調査員、沖縄アーツカウンシル(公益財団法人沖縄県文化振興会)等を経て、2018(平成30)年10月より、長野県県民文化部文化政策課文化振興コーディネーターとしてアーツカウンシル設立に関わり、22年4月より現職。県内外の自治体における文化芸術の中間支援施策に関する提案・助言等を行っている。



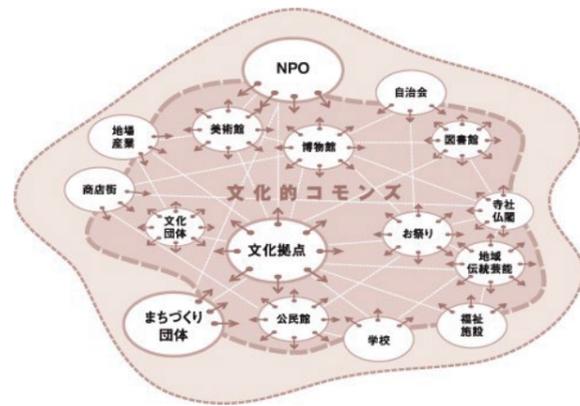
はじめの一步

「劇場をつくるラボ」は、これから社会全体をゆるやかに変えていく取り組みの始まりであると思います。福祉施設にアートの視点を導入したり、文化施設に障害福祉の視点を導入したり、学校等の教育施設にアートや障害福祉の視点を導入するといったことを通して、徐々に広め、最終的には「インクルーシブな共生社会」というような言葉で表される社会を実現しようとしている。実践のないところに「試行」となるプログラムやプロジェクトを導入し、施設等の日常に新たな要素が加わって、実践が積み重なり、徐々に通例とされていくことが期待されます。同時に、他方、障害福祉、文化芸術、教育、いずれの分野においても、「社会に定着する」ことをゴールとするのであれば、越えなければならない敷居があります。社会生活は「施設」の中にだけあるわけではないし、「プログラム」や「プロジェクト」のようにある区切られた時間で閉じられるものでもないからです。施設で試行的なプログラムを実施した上で、施設の外に広がる「地域」との関係や、終わりのない「生活」の時間の中でどう実践ができるか、に問いを展開させていくことも意識される必要があります。地域社会の日常において、ケアの視点やアートの視点が共有され、相互の関わり合いや振る舞いのなかで機能していなければ、文化として根つき、社会的に定着することにはならないわけです。その意味で、分野の専門施設の中で、目的的にプログラムが導入されるというのは限定的な状況であり、はじめの一步である、と捉えることも必要であると考えます。

文化的コモンズ ～文化愛好家だけではない文化芸術の担い手～

私は現在、信州アーツカウンシル(一般財団法人長野県文化振興事業団)という文化芸術の中間支援組織でコーディネーターをしています。「地域の文化芸術の担い手を支援する」というのが仕事です。ただ、一般の住民の皆さんに「アーツカウンシル」といってもイメージが湧かないと思うので、話をわかりやすくするために「美術館とか文化会

館とかありますよね、そういう「館」の外の「地域」にある文化芸術の担い手を支援しています。たとえばお祭りとか、まちづくりとかも含めて…」というような説明をしばしばします。実際には、信州アーツカウンシルの事業では美術館や文化会館とも協働していますし、そうした専門施設はとても重要なパートナーだと捉えているのですが、それでも、「館」の外」というような説明をあえてしています。なぜかという、普段、文化施設に足を運ばない人たちの中には「自分は文化施設にも関係がないし、従って文化芸術とは関係がない」と思っている人がそれなりにいるからです。ただ、私たち信州アーツカウンシルは、文化施設に足を運ばないような人、自分がアーティストや文化愛好家であると思っていない人も、欠くことのできない「地域の文化芸術の担い手」である、と考えています。東日本大震災の後に、一般財団法人地域創造が、被災した地域を中心に調査して、「文化的コモンズ」という考え方を提起しました。「地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地(いりあいち)のような文化的営みの総体」を文化的コモンズと表し、公立文化施設だけではなく、文化団体やNPO、まちづくり団体、自治会、福祉施設、寺社仏閣など多様な主体を挙げ、これらが相互に関わり合うことで地域固有の文化的コモンズが形成されていく、としています。



【図：文化的コモンズのイメージ／(一財)地域創造のウェブサイトより引用】

換言すれば、「地域の文化芸術は、アーティストや専門家・愛好者だけに担われているのではなく、常に、既に、様々な主体にそれぞれの割合で担われている」ということだと思います。それぞれ団体の性格や向いている方向が違っても、地域の文化を担う主体である、という部分、地域の文化はそうした多様な主体によって担われる、という見方はとても重要です。この点は、ケアとアートの関係を考えるうえでも大事にしたいところだと思います。この、文化的コモンズの「文化」のところ「ケア」を代入してみる、あるいは「ケアを文化的に根付かせる」ことを考えるとすれば、福祉施設や文化施設の中だけに「障害 × アート」があるのではなく、まちづくりや自治会、様々な地域の団体・グループに、障害とのかかわりやアートとの関わりがある状態を想定することになります。それはつまり、「障害 × アート」に関わりを持つ「多様な主体」とのつながりづくりをしていく、という活動を考えることになると思います。

多様な主体との関わりで“障害”を分散させる

昨年、信州アーツカウンシルで、「北アルプス国際芸術祭2024を障がいのある方と巡るモニターツアー」という企画を行いました。ザワメキサポートセンター(長野県障がい者芸術文化活動支援センター／長野県社会福祉事業団)並びに北アルプス国際芸術祭実行委員会と共同で、長野県大町市の市街や湖畔、山間部に設置されたアート作品を、アート分野のコーディネーターと、福祉分野のサポーター、知的障害者、身体障害者の方、そのご家族で巡り、その「レポート」をまとめてウェブサイトと紙で発信しました。この時印象的だったのは、アート分野のわたしたちとしては、福祉分野の皆さんからの、障害者の方のケアに関する協力がなければ実現は難しいと考えていましたが、福祉分野の方、また障害者のご家族の方からしても、アート分野からの声掛けがなければ、踏み出すことは難しかった、というようなお話を伺ったことです。それぞれの立場で、得意や苦手、物事の優先順位が異なります。福祉分野からすると「日常よりもリスクがあるところを移動する可能性がある」

ということと「どのアートを観に行ったらいいのかを決めづらい」ということが重なると、芸術祭を観に行く企画自体を進める動機が弱くなってしまふ。そして、ご家族からすると、現場ごとに安全性を判断して進むか退くかを決めることはできるけれど、どの作品を観るかや、移動の条件がどうなっているかなどを予め準備してくれる協力者が居ないと芸術祭に行くという選択肢じたいがなかなか頭に上らない、ということ、また、対応を手伝ってくれる人手がないと自分だけではやりきれない、ということでした。障害者の方のケアについてきちんと準備をすることはもちろん重要です。でもそれ以前に、私がこの取り組みから学べると思うのは、ケアする人たちの心を「無理だろう」「できない」と挫けさせる環境や、協力が得られない関係性、孤立にこそ障害があるのかもしれないということです。そうだとすれば、地域文化が多様な主体によって担われ支えられているように、「ケア」も多様な主体によって担われることで新たな道が開けるのではないのでしょうか。さまざまな「障害」が、障害者の方、ケアに関わる当事者だけに集中するのではなく、地域社会のなかで分散して支えられる状況を生み出すイメージで、様々な人たちが、障害者の方とふれあい、一緒に活動を行う環境づくりをしていくことが大切なのではないかと感じます。「劇場をつくるラボ」の実践においても、地域にある専門施設の内外で、アート分野／福祉分野だけでなく、また当事者とそのご家族だけでなく、普段ケアの担い手とされていない人とも協力しあいながら、障害者の方にとって暮らしやすい地域社会、コミュニティづくりにつながっていくといいなと思います。



日々の表現が生まれたとき

～エピソード集～

美術館や劇場や発表会に行って、目にする「表現や作品」。でも、表現や作品はいつ生まれるんだろう？
そもそも、表現するってどんなことなんだろう？

この章では、編集チームのざこうじるいと篠田葉がケアをする人や学校の先生、家族が出会った
“表現が生まれた時間”を取材し、イラストといっしょにご紹介します。

目次

- P.21 「がんばらない」と書いてほしいなあ
- P.22 トイレ介助が一番のお稽古場
- P.23 アーティストと出会うことで普段とは違う関係性が立ち上がる
- P.24 用務員になってもらったらいい
- P.25 「僕の部屋は～」
- P.26 いっしょに描くともっと素敵に
- P.27 出鱈目語のワークショップ!
- P.28 思った通りのピロピロ大合唱!
- P.29 「私、『お仕事』してきたの。すごいでしょ?」
- P.30 シャワ!シャワ!
- P.31 お、さ、な、な、じ、み



episode
01

#福祉施設 #知的障害 #表現支援 #アートサポート #墨遊び

書いてほしいなあ

「がんばらない」と

障害のある人の口癖を受けて、
ちょっとおもしろい言葉を生み出す
遊びをしてみたら、
新たに生まれた言葉は
多くの人にとって響く言葉だった。



障害のある人の表現の支援をしている
関孝之さんからのエピソード。福祉施設
のあるメンバーは、いつもニコニコと
「がんばれー」と声をかけるくせに、草
取りも掃除もちっとも手伝わない。「く
そー」と思って墨遊びをするときに「お
願いだから『がんばらない』と書いてほ
しいなあ」と伝えてみた。そして彼女が
しぶしぶ書いた「がんばらない」が生ま
れた。その作品を諏訪中央病院の鎌田
實先生に見せると、「これはいい」と作
品を買い取って飾ってくれ、のちに、彼
女の「がんばらない」という言葉は鎌田
先生の書籍のタイトルになった。(るい)

トイレ介助が
一番のお稽古場

episode
02

#福祉施設 #重度の障害のあるメンバー #演劇のお稽古

重度の障害のあるメンバーと演劇活動をおこなうHANA PLAY。普段の稽古の時間より、トイレ介助の時間の方がセリフを覚えやすいらしい。



たんぼぼの家アートセンターでおこなわれる演劇活動HANA PLAYの演出をつとめる佐藤拓道さんからお聞きした話。HANA PLAYは障害のあるメンバーとケアする人がいっしょに演劇活動をしていて、お稽古や作品をつくっていくプロセスもとてもユニーク。セリフを覚えたり、きっかけを覚えたりするのが難しいメンバーといっしょに演劇をやっていくためのさまざまな工夫についてのエピソードの中で、「トイレで個人稽古をしている」という話が面白かった。(しのだ)

普段とは違う関係性が立ち上がる

アーティストと出会ったことで

episode
03

#福祉施設 #デイサービス #アーティスト・イン・レジデンス #彫刻家

「みんなといっしょじゃつまらない」という施設利用者のBさんは、アーティストと出会うことで、新しい関係を築いた。



~~~~~  
 デイサービス「楽らく」にアーティストが滞在するプロジェクト「クロスプレイ東松山」のいち場面。いつも「みんなといっしょじゃつまらない」と感じていた利用者のBさんは、全員でおこなうレクリエーションのときも、少し窮屈そうにしていた。ところが彫刻家のとほさんが滞在していたあるとき、Bさんはとほさんが制作をしている多目的室に足を運ぶ。「私もやってみたい」と伝えたBさんは、その後、いきいきと粘土をこねはじめた。とほさんはその様子をデッサンし、いつのまにか二人の間には特別な関係が生まれる。とほさんが滞在を終えたあとも、二人は施設を介して文通をしているという。Bさんはとほさんと過ごすことによって、少し窮屈だった毎日のなかに新しい居場所を見つけたのかもしれない。(るい)  
 ~~~~~

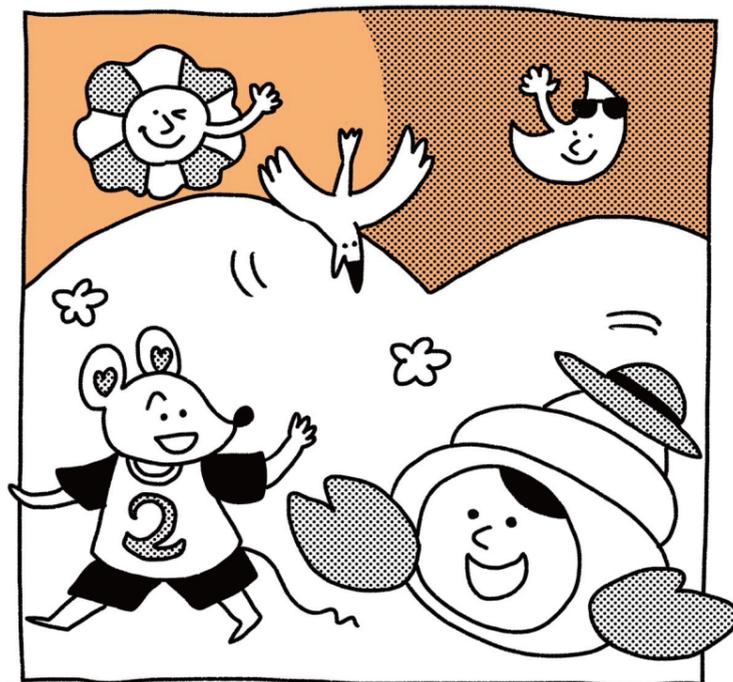
用務員になって

もらったらしい

episode
04

#劇場 #ゲストハウス #カフェ #駆け込み場 #関係をとらえ直す

劇場兼ゲストハウス兼カフェを
民間の駆け込み場として開くと、
さまざまな人が集まってきた。
困ったり迷惑だと感じてても、
関係性をとらえ直すことでいっしょに
いられる演劇の包摂力がそこにはあった。



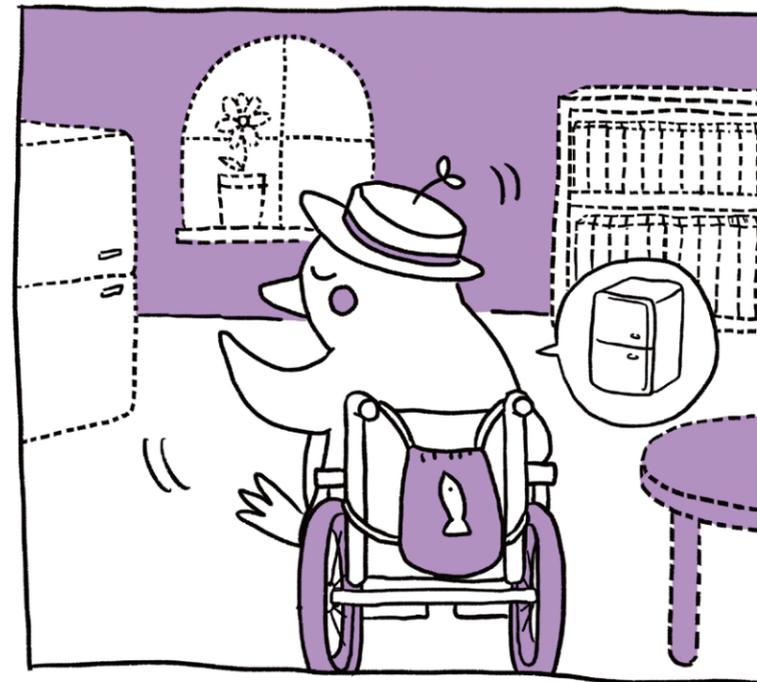
劇場兼ゲストハウス兼カフェである「犀の角」を拠点に運営する駆け込み場「やどかりハウス」のコーディネーター・秋山紅葉さんからのエピソード。泊まるわけでもお茶するわけでもないのに、ゲストハウスのキッチンで毎日食事を作ってふるまう若者に困ったとき、劇場スタッフが「用務員になってもらったらいいか」と呟いたその日から、彼は「用務員」になった。親に頼れず、見知らぬ土地で寂しくて毎日劇場にやってくる彼を仲間として迎え入れる演劇人たちの懐の深さを感じた。(るい)

episode
05

#福祉施設 #重度の障害のあるメンバー #演劇のお稽古

「僕の部屋は〜」

劇作家の岡田利規さんの「部屋の間取りを説明するワーク」を障害のあるメンバーと試した。下津圭太郎さんは、くるっと車椅子の向きを変えて、「ここに冷蔵庫があって〜」と、聞き手に背を向け、その空間を自室に見立てた。その姿に演劇のはじまっていくひとつの瞬間をみた。



たんぼぼの家アートセンターでおこなわれる演劇活動HANA PLAYの演出をつとめる佐藤拓道さんからお聞きした話。HANA PLAYでは、普段からメンバーの日常にある物語(恋愛エピソードや思い出など…)をもとに、さまざまなワークショップを繰り返して作品をつくっていく。このエピソードでご紹介する下津さんは、他のメンバーがその場で自分の部屋の間取りを話していたところ、一人車椅子を動かし、部屋の案内をするかのように話しはじめたそう。下津さんはファンの多い、素敵な役者さんである。(しのだ)

もっと素敵に
いっしょに描くと

episode
06

#学校 #重度心身障害児 #副学籍クラス #図工

重症心身障害児のハル。
学校みんなといっしょに描いた絵は、
一人で描くときには想像できない
深みのある色合いだった。



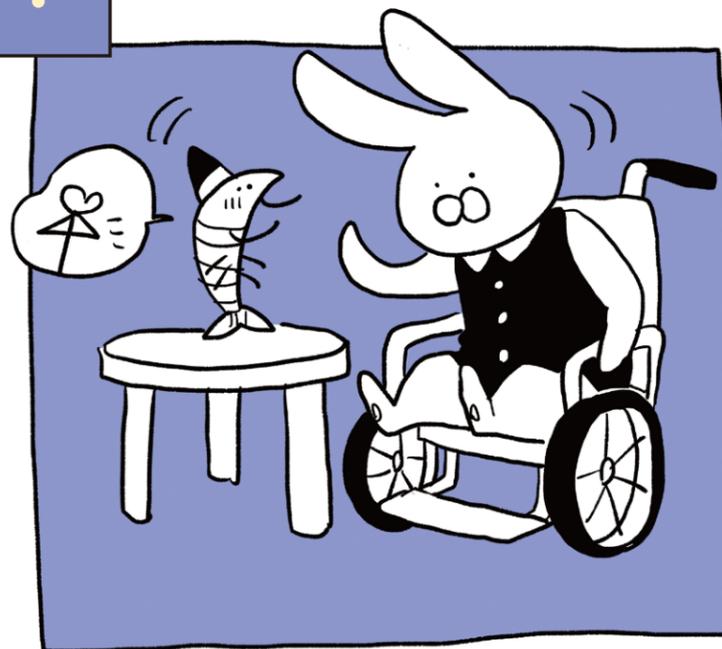
重症心身障害児で、支援学校の重度クラスに在籍しているハルが、地域の学校に登校し、図工の授業でクラスみんなといっしょに絵を描いた。先生がいろんな道具を用意してくれ、みんなは自由にならないハルの手に一生懸命道具を握らせてくれた。ハルとみんなが思い思いに描いた絵は、ハルが普段指先に筆をつけて一人で描く絵（これはこれで素敵）とは違って、とても大胆で深みのある素敵な作品になった。（るい）

出鱈目語の
ワークショップ！

episode
07

#福祉施設 #重度の障害のあるメンバー #演劇のお稽古

ひとりが出鱈目な適当語を話し、
もうひとりが想像してその適当語を
翻訳する遊び。あるメンバーとスタッフの
適当語翻訳のやりとりは、内緒話だった。
みんなの前で話すことを嫌がるメンバーも、
こしょこしょ話だと、たくさんやりとりできるみたい。



たんぼの家アートセンターでおこなわれる演劇活動HANA PLAYの演出をつとめる佐藤拓道さんからお聞きした話。演劇をつくっていくとき、「障害のあるメンバーは台詞を覚えたり、演技をすることが難しいわけではなくて、何か解けるきっかけがあると演劇が生まれる」という佐藤さんの言葉が印象的だった。形にしないといけないということが先行するのではなくて、その人らしさが漏れ出たところに生まれた演劇をつなぎ合わせていくというHANA PLAYの日常が滲んだエピソードだなと感じた。（しのだ）

思った通りの

ピロピロ大合唱!

episode
08

#特別支援学校 #教室 #毎日が演劇 #先生の仕込み

特別支援学校のW先生は、ある日、一人の子が川に溺れる演技をはじめたのを見て、翌日「ピロピロ笛」を買ってきた。すると案の定、その子はピロピロ笛を使ってより迫真の演技で溺れ、みんなも後に続いた。



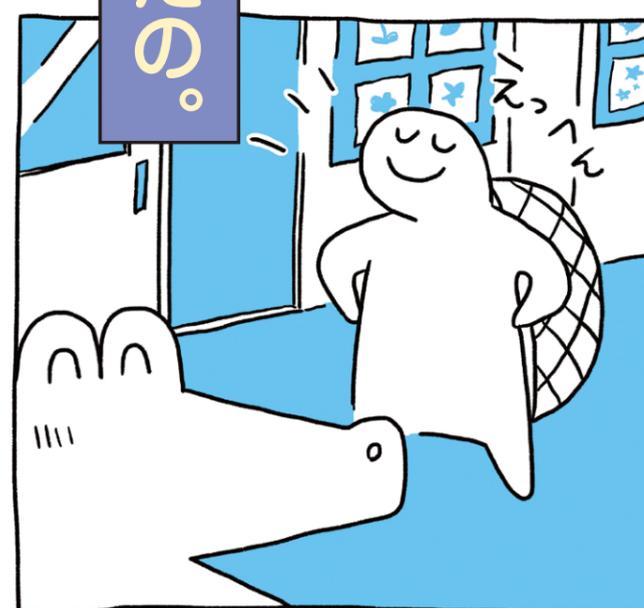
特別支援学校の教室で、演劇を取り入れていたW先生。ある日、お魚のイラストを川に見立てた場所に置いてみると、Tくんが川に溺れる演技をはじめた。するとW先生は、ピン!とあることをひらめく。「『ピロピロ笛』があったらもっと気分が盛り上がるのではないか?」その夜W先生は100円均一に駆け込んだ。翌日、同じようにTくんが川に溺れた瞬間「ピロピロ笛」を差し出すと、Tくんはそれを使って川の水を吐き出す演技をはじめた。それを見た周りの子たちも、次々に川に溺れ、先生の思った通り、ピロピロ大合唱になったという。(るい)

episode
09

#特別支援学校 #作業訓練 #仕事

特別支援学校に通う、重度の障害があるHちゃん。1日体験で「お仕事」を経験すると、誇らしそうに廊下を歩き、「私、今日『お仕事』してきたの。すごいでしょ?」と表情で伝えた。

「私、『お仕事』してきたの。すごいでしょ?」



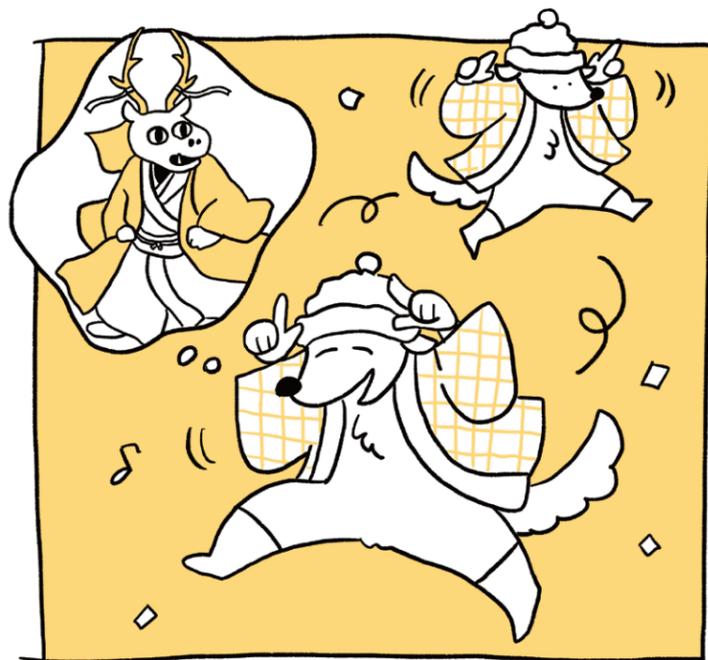
特別支援学校高等部2年生、Hちゃんのお母さんからのエピソード。中学部3年生のとき、お仕事の1日体験をしたHちゃん。やったことはごくごく簡単な単純作業だったけれど、お仕事体験後のHちゃんは見たことがないほどの誇らしい顔で廊下を歩き、すれ違った先生に「私、今日『お仕事』してきたの。すごいでしょ?」と表情で伝えてくれたという。誰かの役に立っているという感覚がHちゃん表情を大きく変えたのだ。言葉を話さないHちゃんは、卒業後、「生活介護」とよばれる日中の介護サービスが受けられる場所を探しているけれど、ただケアを受けるだけでなく、誰かの役に立てる時間があるとよいなと思っている。(るい)

シャワ！シャワ！

episode 10

#ダウン症の男の子 #インド #チベット仏教の芸能

ダウン症のリスメットくんは氷点下の中、何時間もじっと待った後、色とりどりの仏様や動物の仮面を被った僧侶たちの踊りを見て「シャワ！（鹿！）シャワ！（鹿！）」と真似て跳ねる。ユニークなうねりある動きと声になんとも言えない力を感じた。



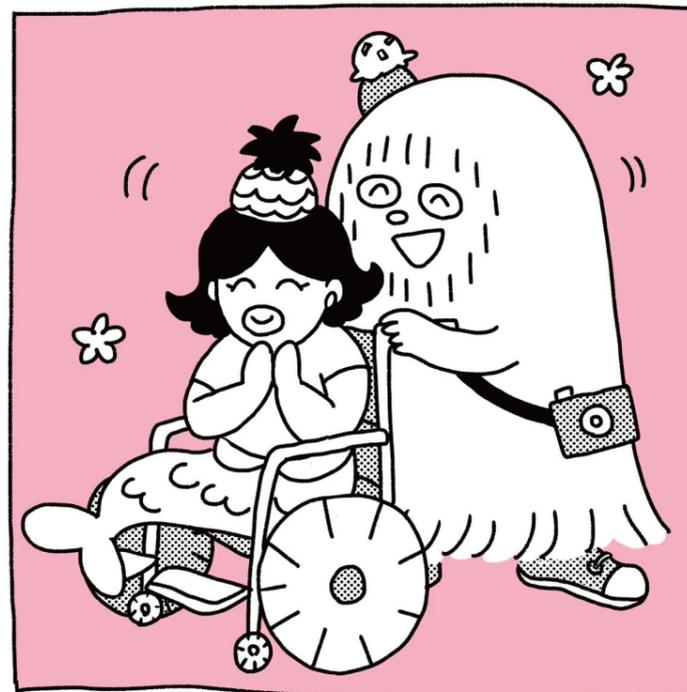
~~~~~  
 2025年の春に、インド最北端のチベット文化圏、ラダックを訪れたときのこと。寺院の芸能を観に行ったときに、アテンドしてくれた宿「The Nyamshan house」の一家の長男・リスメットくんはダウン症の男の子。声と動きが素敵な、とてもやさしい子だった。地域の人から「障害のある子だから、お坊さんの修行をしたら？」とすすめられることもあるのだそうで、お母さんも「芸能や表現を何かやってみたらいいと思っている」とおっしゃっていた。（しのだ）  
 ~~~~~

お、さ、な、な、じ、み

episode 11

#地域 #障害児 #幼馴染 #再会

同じ名前、同じ年で、少し違った障害のある同じ村の二人の女の子。しばらく離れ離れに暮らした後に久しぶりに再会するシーンは演劇のようだった。



~~~~~  
 重度心身障害児で目が見えないハルは、生まれたときに住んでいた村で同じ名前、同じ年で、耳が聞こえにくい女の子と出会った。同じ療育園に通い、親子ともに仲良く過ごした後に、親の都合で引っ越し。7年のときを経て、車椅子で目が見えないハルは、耳が聞こえにくいハルちゃんに再会。耳が聞こえにくいハルちゃんはお母さんに教えてもらった「幼馴染み」という言葉をゆっくり噛みしめるように「お、さ、な、な、じ、み」と言いながらハルの車椅子を満足そうに押した。（るい）  
 ~~~~~

日本における 障害のあるアーティストの活動と課題

寄稿コラムでは、障害とアートの分野で活躍する実践者や専門家に、それぞれの立場から障害と身体表現やワークショップを取り巻く環境や実践について、2025年、今まさに考えていることを綴っていただきます。

私がアーティストとして辿ったこの20年

「日本における障害のあるアーティストの活動と課題、森田さんが今考えていらっしゃることを自由に書いてください、と言っていた。いささか重めなテーマで、少し迷ったのだが、私の頭にあることをとりあえずすべて書いてみようと思ってお引き受けさせていただいた。私は18歳から演劇をはじめた。さまざまな景色を見ることができた20年だった。時の経過により、私の前に広がる風景は少しずつではあるが変化したと思う。それは障害のある人の社会参加という点においても、障害のある人が芸術活動に関わることにしても。ただ、まだまだだと思ふことも多い。

私が主に携わる「ダンス」においては、地域差はあるが、ダンスを主体的に、または余暇活動として取り組む事業所も多く見られるようになり、障害のある人にダンスを教える教室も増えた。公共ホールの取り組みとしても、障害のある人だけでなくさまざまな身体の方を想定した催しも増えてきた。ジャンルも社交ダンスをベースにした車椅子ダンス、コンテンポラリーダンス、ブレイクダンスなど多様になり、ダンスバトルやダンスイベント出演をするといった姿が見られるようになった。テレビや映画など映像界限でも、障害当事者の俳優を使おうとする兆しが見られる。まだ圧倒的に数が少ないので、まだこれからといったところだが。しかし、障害者俳優を起用することが、新たな感動ポルノに繋がらないかも危惧している。健常者を含むマジョリティが求める都合のいい障害者像を描いてしまわないか。またそうなった場合、マイノリティである障害のある俳優は異を唱えられるのだろうか。

「障害者」という存在に大きな意味を持たせるのではなく、「当たり前」にそこにいる人を演じるためのさまざまな俳優が存在すべきなのだが、まだまだまだまだ道のりは遠いと感じる。障害者をまるで小道具のように使うのではなく、ましてや対外的な印象操作のためではなく、俳優として評価し起用する。そこに至るまでには、演出家、映像監督、プロデューサーなど制作側の意識改革が求められる。いや、俳優だけではない。作家、演出家などに至るまでのクリエイターの中に障害のある人は現在ほぼ見られない。俳優だけでなく、障害を持ったクリエイターを

育成する場の増加が望まれる。障害のある人が芸術活動に携わる場に行きつくまでのアクセシビリティの欠如は、大きな影響を及ぼしていると思ふことができる。劇場ですらまだ開かれているとは言い難い。（一方で、デファクターズ・コースのように手話言語を使用する俳優に特化したプログラムがあることも興味深い。）相対的に芸術活動に触れる障害者の数は増えている実感はあるが、他の当事者パフォーマー（俳優でありダンサーである私を称するためにあえてこの言葉を用いると）が何を考えているのか、実はあまりよく知らない。そして、知りたいと思っている。

ふと思ふ。日本では障害のあるアーティストは一体どれくらいいるのだろうか？

「障害」というカテゴリをどのように考える？

日本では障害者文化芸術推進法が2018年に制定されたが、この法律は努力義務であり強制力はない。また文化庁の障害者芸術文化推進事業でも、障害者の参加の割合は示されていない。本当にどれくらいの数があるのだろうか。そして障害のあるアーティストが主体的に関わる機会が非常に少ない。どうしても受け身的な存在となり、自発的にものを創り考える機会が少ない。以前、イギリスでは障害のあるアーティストに助成金がおけると聞き驚いたことがある。日本は基本、事業や機関(施設)ベースである。

加えて、相対的に数が多くないにもかかわらず、アクセシビリティを含め、情報提供が分散傾向にあり、集約されない傾向にある。障害のある人の公演(展示)情報、多様な人との創作プロセスの開示や公演終了後の批評についても、個々の主催者や支援団体では限界があるように感じる。またそれぞれの団体が交流することも多くはみられない。海外の充実した情報の提供を公的な機関が運営している様子を見ると(例を挙げると、韓国の i-eum オンライン <https://www.ieum.or.kr/>、イギリスでの Disability arts online <https://disabilityarts.online/>) 国全体として取り組む意欲が見える。

もしかしたら一部の人にとっては、「障害者」と限定することは時代を逆行していると感じるかもしれない。

森田かずよ (俳優/ダンサー)

先天性の障害を持って生まれる。自身の身体と向き合いながら、表現の可能性を考え続ける。「Performance For All People.CONVEY」主宰。ダンスカンパニー「Mi-Mi-Bi」所属。演劇・ダンスの領域を超えて国内外の多数の公演に出演し、TVなどメディア出演も多数。東京パラリンピック開会式ソロダンサー。NHKドラマ「パーセント」出演。障害のある人を含め、さまざまな方を対象としたダンスのワークショップを日本各地で展開。現在、大阪大学人文学研究科人文学専攻博士後期課程在籍中



世の中は流行語のように「共生社会」や「インクルーシブ」という言葉に溢れている。日本はどうしても「誰もが同じである」「それぞれ個性がある」といった言葉で薄めてしまい、今ある問題点を不可視化してしまう。私は自分が表現をしていく中で「障害」というカテゴリーをどうとらえ、向き合っていくのか、当事者である私はしばしば悩む。もちろん「障害」は多様であり、カテゴライズなのか、アイデンティティーなのか人によってとらえ方が違う。今一度「障害」というものについて考える。

アーティストを夢見るあなたへ

ダンサーになりたい、俳優になりたいと夢見る障害のある人がいるとする。日本では障害の有無にかかわらず、ダンサー、俳優などのアーティストの仕事に就くことが難しいとされていることもあり、どうしても個々の能力に依拠してしまうことが多い。努力して成し遂げることを美德とし、そこに障害を交えることは危険であると感じる。そもそも「能力」とは何だろうか。ダンサーとして日々その言葉に向き合う。私たちは当たり前のように、右肩上がりに自分の能力や身体が成長すると信じている。もちろん障害のある人も、他者との関わりとともに、個人の努力とともに成長していく。しかしそれは健常者の身体に向かっていることでも、健常者がマジョリティである社会で認めてもらうことだけでもないと思う。

「表現において障害の有無は関係ない」という主張を目にする。それはイエスでもあり、ノーでもあると私は思う。障害者がマイノリティである限り、「権利」として守り闘わなければならない部分が多くある。アクセシビリティ環境や闘わなければならないことが多すぎる。しかし、障害のあるアーティストが連携することもないし、問題を共有することもない。これはあまりに寂しいのではないか。

もちろん「障害」がすべてではない。障害の社会モデルが呈するように「障害」は社会にあり、個人にあるのではない。障害のない他者による無関心やスティグマ(偏見)によるものもある。

私個人の考えとなるが、アーティストとして何をしていくか。私は「障害のあるアーティスト」というひとつのアイデンティティーを大切にしたい

と思っている。しかしそれもあくまで私を構成するひとつである。すべてではないのだ。「違い」であることを前提にしつつ、ただ「違い」という言葉で、矮小化していいのだろうかという想いが残る。私はダンサーで俳優であり、アーティストでありたいと思う。この社会の中で、この身体で生きていることが、私の表現の礎になっている。私の生きている身体から発していきたい。「障害」もその私の身体のひとつである。そこに誇りを持ちたいと思う。

私個人としては、「障害者」というアイデンティティーを持ち、緩やかに連携し声をあげつつも、「障害者」という枠を超えた場でもぜひ挑戦してほしいと思う。そこにはたくさんの可能性があると思う。私自身、「障害者の」というカテゴリーのない時代に、身体一つで飛び込んだ。少しずつ、ひとりずつ理解を得ながら、社会の変化とともに今の私がいる。「私」と「あなた」との間には境界がある。その境界を意識し認め合いつつ、それぞれの身体や感覚を交換していくことができる。だからこそ、一步勇気を出して外に踏み出し、掻き回してほしい。そこで得た経験を踏まえ、一緒に声をあげてほしい。きっとそれが社会を変えていくと信じている。



身体と表現

～全国の9の事例集～

音楽、演劇、ダンス、なんとも名前のつけようのないユニークな創作。発表や公演を目指すものから、日々の施設での活動としてその場に流れる時間や人そのものを大切にするような活動、それらすべてが絡み合ったようなもの…。長年活動されている福祉事業者や支援者の企画、アーティスト主体の活動や劇場などの文化施設の実践。

この章では、障害のある人と身体(表現)の活動の「さまざまな軸」に着目しながら、全国で実践されている身体表現の9の事例をご紹介します。



福祉施設×表現の発見

実施期間:2005年ごろ～

#福祉施設 #福祉施設に出張ワークショップ #問題行動も表現ととらえる



① 出前アートワークショップ / モーソー会議

ポケットいっぱいにごみを溜め込んでいた人には、まずは中を見せてもらえるようお願いし、デジカメを手渡してその写真を毎日撮るように提案。後日写真展を開催した。本人は気まずそうな顔をしてその写真を眺め、以来、ポケットの中身は少しずつ減っていったという。



出前アートワークショップ

福祉施設に出張し、障害のある人たちの表現を支援する取り組み。関さんは墨遊びや色遊びなどがメインだが、支援者によっては絵画や音あそびなどさまざま。

モーソー会議

問題行動とされるものを表現ととらえ、そこにどんな思いが込められているかを職員・利用者とともに探り当てる会議。込められた思いをもとに、声掛けや関わり方を変えていく。

関孝之

「社会福祉法人かりがね福祉会」で「風の工房」を開設し、表現活動を支援。退職後もフリーランスとしていくつかの施設に向向いて表現活動を支援したり、サポーターの養成に尽力する。2016年～2019年まで信州ザワメキアート展実行委員長。

どのようにはじめた?

長野県上田市の「かりがね福祉会」の職員として、障害者の自立共同生活を目指す「風の工房」を設立した関さんは、パン製造や陶芸をはじめたものの、商品づくりはうまくいかなかった。あるとき「こうあるべき」という思い込みが自分の中にあっただことに気が付き、ものづくりをアートの視点からとらえるようになる。その後、アートに活動の軸足を移していこうと決め、「かりがね福祉会」を退職。あちこちの福祉施設に向向いて表現の支援をする「出前アートワークショップ」をおこないながら、人を主役にした支援を訴える。また、同時期に精神科病棟の退院支援に携わった経験から、「長野県知的障害福祉協会」から精神科領域の支援会議に声がかかる。関さんはそこで、「暴れたり暴言を吐いたりして困っている」というケースの背景には、ご本人の何らかの思いがあると考えて受け止め、その人の心を満たすような声掛けや関わり方をするよう提唱した。ご本人の来歴や家族関係、日々の暮らしの様子から行為の背景を探ることを、関さんは「モーソー会議」と名付けた。

どのようにやっている?

2011年、関さんの活動に共鳴した人たちと「NPO法人ながのアートミーティング」を設立。県内のいくつかの施設で定期的に出前アートワークショップをおこなうほか、声がかかれば都度出向く。「言葉がなかなか出ない人が多いので、じっくりしてもらえるようにおしゃべりすることが大事なんです。今日なんかは「スイカ食べたい」っていうから、それをそのまま墨で描きました」あくまでも本人の表現を大事にして、いっしょに筆を動かして描く。本人がやりたいこと、描きたいものをもとに、どういう画材でどんな言葉を描くかを提案することが肝だ。関さんが実践する「表現の支援」は、アーティストがアートを指導することとは異なる。関さんは、あくまでも表現を支援する専門家として関わる。

どんなことがあった?

障害のある人の行為を、困った行動としてとらえるか、表現している姿だと受け取るかで、その人に対する見方は変わる。関さんが関わった人の作品が展覧会で評価されると福祉施設の職員はその人のことを尊敬のまなざしで見えるようになった。問題行為とされるものの背景にある不満や不安を探り当て、心を満たしてあげるような声掛けや関わり方に変えるだけで、落ち着きを取り戻す人も多かった。関さんは、アートを支援できる人材を育てようと、「アートサポーター養成講座」も手掛ける。講座は、「下手くそに書いた人が一番」と伝えることからスタート。例えば足で筆を持ったり、ガムテープでぐるぐる巻きにした状態で絵を描いたりして、不自由な状態のほうが自由に線を描けることを体験したり、クレヨンをぐりぐりに塗りつぶす感覚を味わってもらったりする。「障害のある人はもともと「こうあるべき」がないから自由なんです。だからサポートする人間に、まず自分がこうあるべきっていう考え方を全部はずしてもらうんですよ」

ディサービス×アーティスト

実施期間:2022年～

#福祉施設 #いろいろなジャンル #ディサービスにアーティストが滞在 #作品にしなくてもいい



② クロスプレイ東松山

アソシエイトアーティストとして滞在したダンサーの白神ももこさんは、滞在中、利用者Aさんの隣に座り、彼女が動かす手の動きに呼応するように手を動かした。滞在の最後に披露した舞台では、白神さんが手を差し伸べると、Aさんはゆっくりと白神さんの手を取って動かし、そこに白神さんが動きを重ねた。普段は眠っている時間が長く、体力も低下していたAさんが、白神さんをリードするように堂々とふるまう様子に、職員やほかの利用者、観客、その場にいた全員が心を揺さぶられた。



プロジェクト概要

クロスプレイ東松山

(医)保順会が運営する「ディサービス楽らく」にアーティストが滞在中、作品制作やリサーチなどを通じて利用者や職員と文化的に交流するプロジェクト。2022年に始動し、3年間で美術・音楽・演劇・ダンス・写真・短歌などさまざまな分野から16組が参加した。依頼型の「アソシエイトアーティスト」と公募による「公募アーティスト」が随時滞在中。

プロフィール

武田奈都子

「ディサービス楽らく」施設長、社会福祉士。パフォーミング・アーツの制作を経て、2012年(医)保順会の理事に就任。2022年より現職。

藤原顕太

芸術文化コーディネーター、舞台芸術制作者、社会福祉士。舞台芸術のマネージメントに携わった後、福祉と芸術をつなぐ活動を始める。2021年、「一般社団法人ベンチ」設立にメンバーとして参加。

どのようにはじまった?

もともとアートマネージメントの仕事をしていた武田さんは、家業である医療法人を手伝ううちに「医療や介護の現場にアートを介入させることで、これまでとは違った豊かさが生まれるのではないかと考え、社会福祉士の資格を取得。1回限りのワークショップではなく、アーティストが滞在中で常にアプローチできると考えてアーティスト・イン・レジデンス事業を立案し、「ディサービス楽らく」施設長に就任した。始動にあたり、アートと福祉両方について理解できる人材が必要だと考え、藤原さんが所属するアートマネージャー集団、「一般社団法人ベンチ」に声をかける。藤原さんは企画やアーティストのコーディネートだけでなく、楽らくの送迎業務も担当しながら、職員や利用者や信頼関係を構築した。「アートプロジェクトのために送迎をしているというよりは、利用者さんや職員さんに関わる機会の中に送迎業務もあり、アートプロジェクトもある、という感覚です」(藤原さん)

どのようにやっている?

レジデンス事業をやることは決定事項として職員に伝えていたという武田さん。概念的な話もあるが、やりながら感じてもらうことも多い。「実際にアーティストが滞在中のときに、実感を伴って『ああ、そういうことか!』と合点がいく…ということはあるですね」(武田さん)武田さんは、必ず何かを決める前に職員の意見を聞くようにしている。また、滞在アーティストは毎日終礼で自分がその日やっていたことを職員さんに伝える。福祉とアートという、同じ言語やスピード感を共有できる人同士ではない場所だからこそ、方法を探りながらお互いが理解し合っていくことが何よりも大切だ。アソシエイトアーティストについては何らかの作品にしてもらうことを前提としているものの、公募アーティストに関しては、滞在中に必ずしも作品にする必要はない。あくまでも楽らくの日常に流れている文化とうまく共存し、対話することを重視しているのだという。

どんなことがあった?

アーティストの滞在や制作を通じて、利用者への周囲のまなざしに変化する。「制約を気にせず粘土をいじり合える人がいたり、いっしょに踊る人がいたり、語りに耳をすます人がいたりする方が、それぞれのその人らしさや尊厳を大事にできると思うんです」(武田さん)ただし、それがいつもポジティブな反応とは限らない。反動でネガティブな感情が表出する利用者もいるが、武田さんはそれを「どっちもその人」と受け止めている。地域で暮らしていれば当たり前にある雑多な出会いを実現するのがこの企画の魅力であり、「大事なのは“能力の向上”ではない」と藤原さんはいう。「この事業をやったからといって、関わる人が何かをできるようになることを期待するのは違うと思うんですが、一方で関わった人は、場や他の人に対する見方が絶対に大なり小なり変化しているんです。ある人のことをより深く理解できるようになるとか、その人のとらえ方が変わるとか。そういうことのほうが本質なんじゃないかと思っています」(藤原さん)

福祉施設×ワークショップ

実施期間:2025年4月

#スタッフが変った #自分を大切にすることからはじめる #福祉施設職員向け身体表現ワークショップ

③ アライタさんとスズキズとそこにいる・あるという表現を感じて考えるトーク&ミニワークショップ

そこにいる・あることを肯定するってなんだろう?ただ手を合わせる、それだけなのに、その時間がとても美しいと感じるのはなぜだろう?新井さんは、「ALSになる前は僕はとても声が大きかったんだけど」と言ってハーモニカを吹いた。音が参加者の身体をやさしく動かしていく、その時間の中で、ともにいた人が、みんな考えた。



プロジェクト概要

アライタさんとスズキズとそこにいる・あるという表現を感じて考えるトーク&ミニワークショップ

「社会福祉法人ほのぼの会わたしの会社」主催。長年、障害福祉施設の運営、ワークショップのコーディネートをしてきた鈴木励滋さんと鈴木真帆さんのクロストークと、ALS疾患後も体奏家・ダンスアーティストとして活動続ける新井英夫さんと踊る手しごと屋身体パフォーマンスの板坂記代子さんによるミニワークショップを2日間にわたって開催した。

プロフィール

遠藤暁子

社会福祉法人ほのぼの会のわたしの会社施設長。山形大学教育学部養護学校教員養成課程在学中に、まだ作業所として運営していた「わたしの会社」に出会い、ボランティアとして通う。卒業後入職。2014年より現職。施設併設ショップ「桜舎」「桜舎かふえ」「桜舎商店」も運営。

武田和恵

東北芸術工科大学在学中に障害のある人の表現に関心を持ち、卒業後は山形市の福祉施設に勤務。10年の経験を経て福祉とアートをつなぐ活動を志し、2012年より一般財団法人たんぼの家、NPO法人エイブル・アート・ジャパン東日本復興支援プロジェクト東北事務局に。2018年から「やまがたアートサポートセンターら・ら・ら」コーディネーター。2023年より一般社団法人こねる共同代表理事。

どのようにはじまった?

「社会福祉法人ほのぼの会わたしの会社」は、山形市鳥居ヶ丘にある福祉事業所。障害のある人も「わたしの会社」と思える場所を提供したいという思いから、下請け作業は一切おこなわず、創作を通じて社会との接点をつくってきた。鈴木励滋さんの話に感銘を受け、10年来、「山形に来ていただきたい!」とラブコールを送り続けていたという、「わたしの会社」施設長の遠藤さん。励滋さんや、やまがたワークショップ研究会代表の山田カオルさんの後押しがあって、新井さんと板坂さんのワークショップが実現することとなった。「その人がそこにいるということをしかりと受け止められるスタッフ集団になっていきたい。障害のある人の現場には言葉ではないコミュニケーションがたくさんある。職員が、それを感じられる身体でいることが大切だと思って、身体表現のワークショップをやってみようと思った」と遠藤さんは話す。ゲストの新井さんの24時間介助の体制や滞在先のこと、さまざまな不安要素もありながら、看護師でもある山田さんや「やまがたアートサポートセンターら・ら・ら」の武田さん、地域の仲間の連携によって、奇跡的な2日間が実現した。

どのようにやっている?

「なぜアートと福祉で社会を変えていけるのかということを励滋さんに話して欲しかった」と遠藤さん。1日目の夜に鈴木励滋さんと鈴木真帆さんからの座学講義、2日目に新井英夫さん、板坂記代子さんのワークショップをおこなった。ワークショップでは、自然とつながり、身体感覚をゆるやかにひらいていく野口体操のメソッドや言葉を使いながら、新井さんと板坂さんが丁寧に参加者を導いてくれた。遠藤さんは「ひとつひとつのささやかな喜びが、一人ひとりの身体を大事にしていく、そんな場所でした」と振り返る。発表やクリエーション優先ではないワークショップの中で生み出される時間がそこにあった。「誰もおいていけない感じがした。自分の言葉や内面を受け止めてくれる人がいるだけで救われる。これをALSになった新井さんが、新井さんの言葉で伝えてくれたことが良かった」と武田さんも加えた。

どんなことがあった?

「スタッフも大事にされていないと、利用者さんのことも大事にできない。ダンスが職員を肯定してくれた」と遠藤さん。ワークショップを通じて、これから自分たちが大切にしたいことを参加者みんなでも再確認することができた。しかし、一方で、ワークショップの最後に励滋さんが共有した言葉が重く落ちてきたという。「今日のこの時間、とても幸せでした。でも、それだけではいけないと思います。この時間をともに過ごした私たちには、障害があるというだけで殺される社会で、この先に何をしたいのか問われています」後日、ワークショップを受けた職員の中から「自分たちも利用者さんとういうことをやってみよう!」という声が上がって、毎週木曜日に「ゆるゆるらいたいむ」がはじまった。重度の障害のある人、自分では動けない人も1日ダラーっとして、ゆらゆらとゆるやかに身体を動かす。近所の人たちも、中学生も遊びにくる。自分たちのやり方で、自身を肯定する時間や輪を生み出していく。

精神障害×演劇

実施期間:2018年ごろ~いつのまにか

#就労継続支援B型 #劇というきき方 #日々のモヤモヤをタネに創作 #総出で聞く #生きる術



4 劇というきき方

電車に乗れないなど、自分のことを話すことにためらいがあったRさんは、他のメンバーの様子を見て少しずつ話しはじめた。「圧迫感」や「自分を責める考え」に名前をつけて“役”にし、仲間とワイワイ演じた。

そこから演劇作品「VOICE!!!!!!R.ver」が生まれたとき、Rさんは気づいた——。これまで「ひとには知られたくない」と思っていた、自分におこっている現象を、今は「知ってほしい」と思っている自分に。作品を精神科病院でも上演したあと、Rさんはポロリと言った。「人はみんな、ほんとは劇が好きなんじゃないかなって思う」



プロジェクト概要

劇というきき方

精神疾患などを抱える方が通う「就労継続支援 B 型 BaseCamp(以下、ベーキャン)」で自然と育まれた、みんなで“ひとの話をさく”ためのちょっと不思議な方法。誰かが「モヤモヤしてて……」と話しはじめたら、その場にいる人で小さな劇にする。解決のためではない「劇のための対話」には、なぜか場をわくわくほころばせる感じがある。最後は話し手がその物語に“新しいタイトル”をつけ直す。

プロフィール

中島裕子

「NPO 法人 BASE」代表理事。「就労継続支援 B 型 BaseCamp」スタッフ・看護師。精神科病院勤務の後、精神科訪問看護を経験し、「就労継続支援 B 型 BaseCamp」を立ち上げた。

どのようにはじまった?

“日々抱えるモヤモヤを一人で抱えこまずに、この場でちょっと遊びながら、分かち合ったり工夫したりできたらって思ってたんです”

「ベーキャン」代表の中島さんはそう語る。しかし、モヤモヤを言葉にすることはなかなか難しい。さらに、話を聞く側が退屈してしまったり、話をしているといつの間にか誰かに話を奪われたりすることも。

そこである日、体を使って「やってみる」ことにした。話の中の登場人物になって、みんなで小さな劇のようにしてみたのだ。すると、なんだか場がふわっと緩んで面白くなった。そこから少しずつ「劇というきき方」が生まれていった。

“単純に面白いんですよ。劇にするために、そのとき座っていたのか、なんて言われたのか、なんて返したのか……その場面のことを聞いていく。あとは劇にしてみるだけなんです”

どのようにはやっている?

「ベーキャン」では朝のミーティングで「誰か話したい人、いますか〜?」と声をかける。誰かが「あるかも……」と手をあげれば、まず話にタイトルをつけてもらい、みんなで話を聞いて、さっそく小さな劇にしてみる。配役は自由自在で、「自分を責める考え役」や「エアコンの風役」など人じゃないものにも役がまわってくる。「話す」と「劇にする」を1回~3回ほど繰り返し、最後は話し手がもう一度タイトルをつけ直すのがお約束。

“ほとんどの場合、つけ直したタイトルは最初と変わるんですよ”

帰りのミーティングでは「モヤモヤを置いていく儀式」もある。その日のモヤモヤをひとこと話し、「モヤモヤを~取り出して~」と唱えながら、そのモヤモヤをそっと身振りや置いていく。できれば家には持ち帰らずに、“ちょっと付き合いやすいモヤモヤ”になっていたらいいな、という趣旨だ。

どんなことがあった?

モヤモヤを劇にしてみると、自分のなかでおきていることが、いつもとちょっと違うふうに見えてくることがあるという。「困りごとが自分の外に出てきたみたい」と言うメンバーもいれば、演じている側がハッとするようなこともある。その結果、無理にモヤモヤを解消しようとせず、モヤモヤと付き合いながら暮らすことも考えられるようになってきた。

“自分が感じているモヤモヤって、そもそも曖昧なんです。だからモヤモヤを「共有する」というよりは、その場にいる人たちといっしょにモヤモヤを種に「つくっていく」という感覚なんです”

言葉で伝えると強くなってしまいうことでも、劇にすることでやさしくなったり、「劇だから」という言い訳があることで、ユーモアを交えたりしやすくなるという効果もあった。さらに、日常の活動から派生して「演劇作品」も生まれた。2023年には近くの精神科病院で上演する機会も得たことで、メンバーの気持ち盛り上がり、病院が地域とながらぎっかきにもなっている。

福祉施設×ダンス

実施期間:2019年2月~3月

#福祉施設のダンスプログラム #知的障害のある人とダンス #毎週90分の即興 #ホール公演



5 ひるのダンスと共創の舞踊劇「だんだんたんぼに夜明かしカエル」

はいったり、でたり、ゆれたり、とまったり、叫んだり。

同時にいろんなことが起こる舞台。

そもそも客席と舞台の垣根がない。予測が不可能なそれぞれの身体が、それぞれの身体であることを包み込むゆるやかな決めごとだけがある。

インドネシアのジャワ舞踊やジャワガムランの協創的なあり方、アーティストの身体、ともにつくった全ての人のギリギリの試行錯誤が響きあう。



撮影:草本利枝 会場:北千住BUOY

プロジェクト概要

ひるのダンス

「社会福祉法人わたぼうしの会」が運営する「たんぼの家アートセンター HANA(以下、たんぼの家)」で月2回行われている身体表現のプログラム。ジャワ舞踊家の佐久間新さんがファシリテートをして、即興型のワークショップを行なう。

共創の舞踊劇「だんだんたんぼに夜明かしカエル」

ひるのダンスから生まれたさまざまなダンスをもとに、障害のある人、ケアする人、ダンサーや音楽家が、ユーモアを交えて共創した舞台作品。神戸と東京で2回の劇場公演を行った。佐久間新さんは演出・振付・出演として関わった。(主催:文化庁/一般財団法人たんぼの家)

プロフィール

佐久間新

幼少の頃、臨床心理学者の父が自閉症児と転がる姿を眺める。大阪大学でガムランをはじめ。同じ頃、流れる水のように舞うジャワ舞踊家ベン・スハルト氏に出会い、留学を決意。帰国後、さまざまなダンサーとコラボレーションを開始。たんぼの家の障害者との出会い以降、即興ダンスとマイノリティの人たちとのダンスに傾注。現在は、ジャワ舞踊をベースにアート、領域横断的な協働、新作発表など国際的に幅広く活動している。

どのようにはじまった?

たんぼの家と佐久間さんの協働は、2004年度の「エイブルアート・オンステージ・ガムラン実行委員会」。当時、佐久間さんが所属していたインドネシアの伝統音楽、ジャワガムランのグループ「マルガサリ」とのコラボレーションだった。その後、たんぼの家から「スタッフにワークショップをしにきて欲しい」と声がかかったのが20年前。2011年に障害のあるメンバー向けのプログラムとして「ひるのダンス」がはじまった。

現在、参加している障害のあるメンバーは12名で、回ごとに参加人数は変動。ときにはダンスの見学に来たお客さんともいっしょに踊ったりなど、自由な即興ダンスが繰り返されている。90分間の即興と90分間の振り返り。即興は何も決めない。90分間ほとんど動かないこともある。一方で、振り返りの時間は記録映像などもみながらスタッフと飛び込み参加者で「何が面白くて凄かったのか」「ダンスの面白さや自分たちの強み」を散々喋り、丁寧に全ての記録を残してきた。当時5年近く毎週重ねてきたひるのダンスも100回を超え、生まれてきた表現やわかってきたことを発信していきたいということで、ひとつのアウトプットの形として公演「だんだんたんぼに夜明かしカエル」を企画することになった。

どのようにはやっている?

佐久間さんはこれまでメンバーと「即興」をやってきた。しかし公演となると、再現可能で、ホールで上演する前提を踏まえながら構成をする必要があった。「知的障害のあるメンバーが無理やり手順や振付を覚えたり、スタッフにサポートしてもらわずとも、その場に参加できるようにつくりたい。」“共創の舞踊劇”というコンセプトもあり、制作の過程で高齢者施設や子どもの共同自主保育グループとひるのダンスで重ねた経験を共有したり、公演を実施する地域ごとに、さまざまな立場の人たちが20名以上いっしょに舞台にあがる作品となった。子どもから大人までさまざまな出演者たちがいる中で、安全性も考慮しなければならない。振付はしないけれど、ゆるやかなきっかけは決める。「お祭りのような、芸能のような、儀式のような。出演者みんなが、だんだんたんぼのかえるであるかのように。そうやってつくっていけば、先にある何か、つまり“舞台”は立ち上がるはず」と考えた。作品として成立しているのか、これがどういう作品なのか。さまざまな人に、ときには厳しい意見をもらいながら、試行錯誤を進めていった。

どんなことがあった?

神戸と東京の2つの公演が終わったとき、何が起こったのか、どうだったのかは佐久間さん自身もわからなかった。ただ、周囲の反応から「問題作であることはわかった」という。参加していたアーティストからは「ホールでやらなくても、たんぼの家でやればいいのに」と言われたこともあった。しかし、メンバーたちの表現を沢山の人の目にみてほしいし、ホールでやりたいという欲もあった。

上演当時、東京2020オリンピック・パラリンピックへと向かっていく空気の中にあった。コロナも経て、今、共創の舞踊劇「だんだんたんぼに夜明かしカエル」を見直してみると「これでよかった」と思うと言う。あらためて作品を面白いと言ってくれる人の声も聞こえてくるようになった。

一方、これからも、障害のあるメンバーとの何も決めない90分の即興と90分の振り返りである「ひるのダンス」はつづいてゆく。

ミックスエイブル×ダンス

実施期間:2022年～

#ダンスカンパニー #国際交流 #さまざまな身体から作品を紡ぐということ



6 コンテンポラリーダンスカンパニー「Mi-Mi-Bi(みみび)」

劇場を運営する文さん、演出を担当する紅玉さんの後ろ姿越しの、「Mi-Mi-Bi」メンバー稽古中の風景。

多様な人が暮らす新長田というまち、多様なアーティスト、文化芸術を愛する人たちがつどってきた劇場「DANCE BOX」で紡がれていく身体



Mi-Mi-Bi

社会や暮らしのなかに障害を覚える身体のパフォーマーを含む、コンテンポラリーダンスカンパニー「Mi-Mi-Bi(みみび)」。それぞれに異なる身体性や感覚、世界の捉え方を観客と共有できる方法を模索し、兵庫県神戸市の新長田という地域にある「DANCE BOX」という劇場を拠点に作品創作を行っている。2022年に結成し、豊岡演劇祭2022フリンジセレクションにて「未だ見たことのない美しさ」上演。その創作のプロセスを追ったドキュメンタリーも、映像作品・映画として公開され話題を呼んだ。2024年豊岡演劇祭公式プログラムとして「島ノ舞」を上演。

森田かずよ

俳優・ダンサー。先天性の障害を持って生まれる。自身の身体と向き合いながら、表現の可能性を考え続ける。「Performance For All People.CONVEY」主宰。ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi 所属。演劇・ダンスの領域を超えて国内外の多数の公演に出演し、TV などメディア出演も多数。東京パラリンピック開会式ソロダンサー。NHK ドラマ「パーセント」出演。障害のある人を含め、様々な方を対象としたダンスのワークショップを日本各地で展開。現在、大阪大学人文学研究科人文学専攻博士後期課程在籍中。

どのようにはじまった?

「Mi-Mi-Bi」の中心メンバーである森田さんは、18歳より舞台上に立ち始め、イギリスなど海外の障害のあるアーティストの活動もみてきた。「日本でも障害のあるアーティストによるカンパニーを作りたい継続的にやれる仲間と場所が欲しい」と森田さんは「DANCE BOX」の事務局長の文さんに伝え続けた。2022年の設立から現在3年目。「Mi-Mi-Bi」には現在、医療的ケアが必要な人も含め4名のメンバーが在籍している。いずれも「DANCE BOX」が主宰した2007年の身体表現プロジェクト「循環プロジェクト」と2019年の文化芸術創造活動「こんにちは、共生社会」は大きなきっかけとなったが、「Mi-Mi-Bi」の原型となったのは、障害のあるアーティストが集まって、各自ソロダンスとデュオ(二人ひと組)でダンスのパートをつくり、それを組み合わせて作品をつくってみるという企画だった。与えられた振付ではなく、即興と対話からダンスをつくっていく。そういうスタイルにあった人が残った。福角幸子さんは当時から今まで、「Mi-Mi-Bi」を支えるメンバーである。

どのようになっている?

「Mi-Mi-Bi」とは、「未だ見たことがない美しさ」という意味。時代の流れの中で、障害のある人と文化芸術を取り巻く環境も変わった。メンバー同士では、自分たちのカンパニーについて言語化する時には、「インクルーシブダンスカンパニーとは言われたくない」と話している。2024年の公演は森田さんが演出をつとめた「島ノ舞」(しまじまのまいまい)。それぞれの身体、感覚を持ちながら、新しく文化を創り、歴史を積み重ねている姿を「島」に例えて構成した作品だった。2025年の「Mi-Mi-Bi」の新作公演は、紅玉(あかだま)さんが演出を務める舞踏をベースにした作品である。「紅玉」は、大阪生まれの演出家・振付家で新長田に「DANCE BOX」を立ち上げた大谷煥さん(おおたにいく)のアーティストとしての名前である。さまざまな演出家、アーティストとの交流から自分たちの身体や表現、共通言語がみえてくる。

どんなことがあった?

2025年9月には、鈴木ユキオ×Stopgap Dance Company 国際共同制作プロジェクト「Beyond!」との共同で、イギリスで20年以上活動するダンスカンパニー Stopgap Dance Company とのコラボレーションも行った。2025年はこれから台湾・韓国のカンパニーと共同制作も予定している。メンバーの高齢化、24時間介護が必要なメンバーがいること、メンバーや大切な仲間の身体の変化や死、不在に対峙し、「そもそも作品制作を続けていけるのか?」という岐路に何度も立たされてきた。「西洋のインクルーシブカンパニーをみてきたから、うちもそんな風になりたいと最初は思っていた。でも今は、うちはそうじゃないかもしれないと思うようになった」「個人ではなくて、チームであることが重要」だと、今、森田さんは考えている。

子ども×アーティスト

実施期間:2000年～

#学校 #児童福祉施設 #少年院 #いろんなジャンル #子どもたちとアーティストをマッチング



7 ASIAs (エイジアス: Artist's Studio In A School)

児童養護施設のワークショップに参加していたAくんは、あるとき障害児入所施設に入所した。ワークショップをしていた体奏家の新井英夫さんが、別のプロジェクトで訪れていた障害児入所施設で偶然にもAくんと再会。これがきっかけとなり、障害児入所施設でもワークショップがはじまった。以来10年近く、月1回程度のペースで身体表現のワークショップをおこない、現在は舞踏家の松岡大さんと通っている。年度の最終回に設ける発表の場では、最後にはみんな一緒に踊って、人と人がつながり時間や場を共有する瞬間が生まれる。



ASIAs (エイジアス: Artist's Studio In A School)

現代アーティストと子どもたちが出会う「場づくり」をおこなう「NPO 法人芸術家と子どもたち(以下、芸術家と子どもたち)」のプロジェクト。プロの現代アーティストが、学校教育、児童福祉、矯正教育、医療、地域の現場など子どもたちがいる場へ出向き、先生や職員と協力してワークショップを実施する。「芸術家と子どもたち」は、子どもたちのいる場とアーティストをつなぎ、コーディネートする役割を担う。

中西麻友

NPO 法人 芸術家と子どもたち 事務局長。1980年大阪生まれ。成安造形大学デザイン科写真クラス卒業。大阪市内の小学校教諭、Kingston Universityへの留学を経て、2011年3月より「NPO 法人芸術家と子どもたち」に入職。ワークショップ・コーディネーターとして、学校や児童福祉施設、少年院、小児病院や地域の子どもの居場所に関わる事業等を担当。

どのようにはじまった?

「芸術家と子どもたち」設立者の堤康彦さんは、もともと企業のホールやギャラリーで文化芸術の企画をプロデュースしていた。1999年、ごく普通の子どもたちにこそ文化芸術に触れてほしいと、活動を開始。小学校に現代アーティストを招いてワークショップ型の授業をおこなってみると、単純に芸術に親しむということ以上に、子どもたちの他者とのコミュニケーションやものごとへの向き合い方などに変化を感じた。こうしたことが学びにおいてとても重要なのではないかと考えた堤さんは、2001年にNPO法人化。子どもたちとアーティストが出会う場づくりを本格的に開始した。「これによって端的にいじめがなくなる…とかいうわけではないですが、子どもも大人もかかわる人たちに何か気づきや発見があって、楽しいと思える場をつくりたいと思ひながら活動しています」同法人事務局長の中西さんはそう話す。2024年のワークショップ実施実績(ASIAsのみ)は、1年間で138校・園・施設、552日に及んだ。

どのようになっている?

希望する学校や福祉施設などからの申し込みをもとに、まずはそれぞれのニーズに合うアーティストを選定する。その後、「芸術家と子どもたち」のスタッフがコーディネーターとして橋渡しをし、数回の打ち合わせを経て実施。単発だけでなく、年間を通して継続する場合もある。運営費は企業の助成金や自治体の協働事業を通じて獲得。当初は学校の通常級が中心だったが、2010年前後から特別支援学級にも対象をひろげ、現在は特別支援学校や児童養護施設、少年院、小児病院でも実施する。通常の授業では課題があるとされがち子どもたちが、ワークショップでは突破口となる表現をみせたり、みんなの見本になったりすることもあった。例えば通常級と特別支援学級が混ざり合うワークショップでは、最初に特別支援学級の子どものみだけを対象に時間を使う。その後、通常級の子どものみと混ざり合う時間では、特別支援学級の子どものみだけが教える側に回る時間をつくるなど、参加する子どもたちの状況によってその都度時間割や方法を編成する。「毎回子どもたちや先生とともに「今回はこれがよかったね」と話し合いながらつくり上げています」

どんなことがあった?

アーティストと出会うことによって、子どもたちは多様な関係性を形成する。普段関わりのない他者と交わったり、それによりときに思いがけない創造力を発揮したり。こうした成果は最初から確約するようなものではないけれど、失敗のように見えることも含め、さまざまなプロセスをたどることそのものが大事だと中西さんは言う。「コンテンポラリーな現代アーティストを起用することによって、答えが一つではないさまざまな価値観を掘り起こす面白さがあると思っています」特別支援学級の子どものみと通常級の子どものみとが混ざり合うワークショップでは、「部活何やってるの」など自然とコミュニケーションをとり合う場面もみられた。さらに、障害のある子どもたちと日常的にかかわる複数の施設の職員同士が交流する機会をつくる試みとして、2024年度は座談会を実施。活動を通じて施設や学校の違いを超えたネットワークが生まれ、障害児支援や教育について意見を交わす場にもなった。

実施期間：2021年～

#地域の祭 #演劇の力 #聞き書き #子どもからシニアまで



8 世田谷区下馬地区の「極楽フェス」

極楽ソングをうたいながら、カラフルな帽子を被って、和服姿に、サンタクローズに、キティちゃんのぬいぐるみが、賑やかに練り歩く。一行が向かった先は、高齢者施設。

極楽とは、「ともに生きている人を見捨てない、自分を見捨てない」という。教えのことだという、その思想にみんなが共感して、このフェスは続いてゆく。



撮影：橋本貴雄

極楽フェス

東京都世田谷区の下馬地域で2021年にスタートしたアートフェスティバル。世田谷パブリックシアターと、下馬地区の地域の団体・組織との協働のもと、地域のちよとした広場や集会所等の顔の見える範囲の中で、演劇や対話のプログラム等、各団体がやりたいことが行われている。今回は、2026年春に開催予定。

恵志美奈子

世田谷パブリックシアター劇場部 創造環境開発担当。学芸担当時に世田谷区下馬地区の福祉法人等とともに、都営下馬アパートを会場に、地域コミュニティの多様性や他者を知ることを目的にしたアートフェスティバル「極楽フェス」(2021年～)を立ち上げた。

どのようにはじまった？

「極楽フェス」は、世田谷パブリックシアターで2019年当時、地域と劇場をつなぐ事業を担当する学芸グループに所属していた恵志美奈子さんたちが、シンガポールのアートフェスティバル「Both sides, Now」に触発されたことをきっかけに企画した。「Both sides, Now」のBoth sidesは生きること、死ぬことを指し、地域コミュニティの人々が時間をかけて創作した造形作品の展示、フォーラムシアター(社会問題をテーマにした参加型演劇)、歌などのパフォーマンス、子どもたちの楽しめる絵本やお菓子の配布など、市民を巻き込む工夫がたくさんあるフェスティバルだった。シンガポールでの取り組みに刺激を受けて、世田谷パブリックシアターは、2019年から出張演劇ワークショップを開始し、日本版「Both Sides, Now」始動に向けて動きはじめた。コロナ禍に突入し計画は一度は頓挫したものの、地域の会議を経て、世田谷パブリックシアターを含め、地域の11団体が参加して、2021年9月に「極楽フェス」の初回が開催される運びとなった。

どのようにやっている？

世田谷パブリックシアターは極楽フェスでさまざまなプログラムを企画しているが、全てに共通するのは「聞き書き」だ。大きな歴史に対して、こぼれ落ちてしまうような小さな物語を誰か他者が受け取って紡ぐ。「誰かのことを想像すること、誰かの話を受け取るということが重要。プログラムのなかで他者の意見を聞いて、それから日常生活に戻ると、誰かを想像する訓練をして現実世界に戻ったような形になる。演劇というものは、ナラティブ(物語)をもっている。自分ではない誰かを想像させるということは、演劇の得意とすることだと思うんです」と恵志さんは話す。高次脳機能障害の黒田真史さんのライフストーリーを描いた「ともにゃの部屋～黒田真史さん」という演劇作品は、俳優が黒田さんに行ったインタビューから生まれた笑いあり涙ありの人気演目である。「障害のある人に話を聞く」というと、大抵は「大変だった話」になることが多い。しかし、この作品の中では、大変だった話より、人となりか前が出てきた。地域の人たちにとっても、知らなかった黒田さんを知るきっかけが生まれた。

どんなことがあった？

継続支援 B 型事業所「世田谷区立下馬福祉工房」のメンバーがそれぞれ極楽をイメージするワードを出し合い、そのワードからつくられた「極楽ソング」は極楽フェスにとって欠かせない存在である。「極楽ソング」を団地の踊りの師匠に渡したところ、踊りの振りをつけてくれることになり、今では、地域のお祭りで必ず踊られる定番盆踊りソングになった。極楽ソングを歌いながら、地域内のさまざまな施設を巡るちんどん屋も人気である。音楽に呼び込まれて練り歩きにはたくさんの方が加わり、当初は点在する会場と会場をつなぐ重要プログラムになっていった。世代を超えてごちゃ混ぜに混ざりあい、互いに顔が見える関係で、想像しあい、対話しあう。そうしてそれぞれが「生きること」を大切にしたいことが、地域の力を育む。下馬地区の祭、「極楽フェス」はこれからも続く。

実施期間：2025年7月

#日本で唯一の国際的な児童演劇フェスティバル #ノンバーバル公演 #0歳から100歳まで楽しめる #演劇は命葉



9 りっかりっかフェスタ(国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ)

子どもも大人も、ことばを超えて心ふるえ、癒されるひとときを——。人形劇やノンバーバルな舞台、パントマイム、ベイビーシアターなど、想像力を揺さぶる作品が集う児童演劇の祭典「りっかりっかフェスタ」。「劇場は命葉(ぬちぐすい)」を掲げ、沖縄の地から平和への願いを込めて、国内外の表現者と観客をつないできた。



撮影：若井なおみ

りっかりっかフェスタ

沖縄で毎年夏に開催される国際的な舞台芸術フェスティバルで、0歳から大人まで楽しめる。「劇場は命葉」をテーマに掲げ、国内外の言語を中心的なコミュニケーションツールとしない作品、主に児童・青少年のための舞台芸術を紹介している。

プロジェクト概要

下山久

「りっかりっかフェスタ」総合プロデューサー/芸術監督。ACO 沖縄(芸術文化協同機構)代表。沖縄を題材にした作品や地域の伝統芸能を生かしたオリジナル作品を多数企画・プロデュース。国内外の芸術家やフェスティバルとネットワークを築き、海外のアーティストとの国際共同作品も多数手掛ける。日本と世界の演劇をつなぎ、子どもたちへ良質な舞台芸術を届ける活動を長く続けている。芸術選奨文部科学大臣賞等受賞。アシテジ・インターナショナル名誉会員。

プロフィール

どのようにはじまった？

りっかりっかフェスタ(国際児童青少年演劇フェスティバルおきなわ)は、沖縄の空には、戦闘機が飛び交うのではなく、いつもいつまでも子どもたちの笑い声が飛び交ってほしい、そんな思いで始まった国際演劇フェスティバル。1994年、アジアで初めてのファミリー向けフェスティバルとしてスタートした本フェスティバルは、2025年で23回目を迎えた。今では国内外から多くの観客や演劇関係者が訪れ、アジアの文化拠点としての役割も担っている。アジアの児童青少年演劇フェスティバルとネットワーク(ATYA:アジア児童青少年演劇フェスティバルネットワーク)を組んでアジアにおける児童青少年演劇の発展に尽力するほか、東京や埼玉、長野、静岡、九州などの国内の劇場、フェスティバルとの連携も広げ、アジアの芸術文化の交流拠点としての役割を果たしている。

どのようにやっている？

フェスティバルが掲げるテーマ「劇場は命葉」に沿って作品が集められる。参加作品の選定にあたっては、ディレクターである下山さんが年に数回海外に足を運び、可能な限り実際に作品を選定している。また、ACO 沖縄の作品は「沖縄に向き合い続け、沖縄の心を舞台で伝えたい」との思いで企画しており、これまでにイタリア、フランス、イギリス、ベルギー等と多くの国際共同制作も手がけてきた。2025年のりっかりっかフェスタは7ヶ国から16作品が参加し日韓国交正常化60年を記念して、日韓共同制作や毎回行っている平和構築のためのシンポジウムも開催された。また、観客にとって言語の壁は大きな障壁になるため、ノンバーバルな作品や、言葉を中心としない表現を取り入れた作品を選定してきた。日本では「子ども向け」という大まかな括りにされがちだが、ヨーロッパでは1～2歳向け、3～5歳向けといったように、子どもの成長に合わせて何を届けるかが丁寧に考えられ、作品が作られているため、フェスティバルとしてもそれに即して作品を紹介している。

どんなことがあった？

沖縄が置かれている立地的な状況、フェスティバルとしての国際的信頼、また観光客の増大も背景に、現在のフェスティバルの観客は英語圏と、中国語圏がそれぞれ2割程度ずつで、日本語圏が6割程度という構成になっている。北京、上海、深圳などをはじめ中国のさまざまな都市からの来場が増えていて、ノンバーバルでファミリーで楽しめて学びにもつながるような文化体験がこうした国々からの来訪者に求められているという感覚もある。継続を重ねる中で、台湾やマレーシア、シンガポール、香港などからインターンや学生ボランティアが参加して、受付など協働作業をしながら地元のボランティアや高校生と友情を育んでいる。りっかりっかフェスタに関する推奨度(アンケート)調査の結果、参加者の80%が「お勧めしたい」という高評価(10段階中8以上の評価)を示しており、多くの来場者に、楽しんでもらったことを示している。今後も「劇場は命葉」を多くの人と分かち合い、質の高い観劇体験を共有する場を創っていきたい。

死ぬのが怖かった少年がいかにして 生きることの美しさを知るに至ったのか

寄稿コラムでは、障害とアートの分野で活躍する実践者や専門家に、それぞれの立場から障害と身体表現やワークショップを取り巻く環境や実践について、2025年、今まさに考えていることを綴っていただきます。

物語が命綱だった

毎晩、床に就くと死ぬのが怖くて泣いているような子どもでした。厳密には、そんなことを考えているこの「わたし」が無くなってしまうのが堪らなく怖かったのです。とりわけ信仰を持たない家庭に育ち、死後の世界も信じられなくてただ怯えていたわたしが、すがったのは物語でした。小学校では図書館にある物語をあらかじめ読みましたし、だいぶ年上の従兄から薦められて中学生くらいから映画にもはまり、高校のころから映画評を書くようになりました。浪人中からやっていたコンビニの深夜バイトの際には、子どものころ禁止されていた反動で、少年誌から女性誌まであらゆる漫画を読み漁り(仕事をしろ)、大学に入ってから均せば一日に1本以上の映画を観に映画館に入り浸っていました(大学へ行け)。きっとそのせいだと思うのですが、人間のことはだいたい解ったという気になって、人間を侮っていたように思います。と同時に自分は「人間嫌い」だと思い込んでいて、卒業したらコンビニバイトをしながら物書きを目指そうと思っていたのですが、ほぼ騙されたみたいな感じで地域作業所のスタッフとなったのが1997年のことでした。

そこで出会った人たちが、わたしの想定をことごとく超えてくる人たちが、人間のおもしろさを教えてくれたのです。それはけっして「障害者はピュアだ」とかいう類ではありません。自分の望みに忠実な人もいれば、他者の目が気になりすぎて委縮している人もいましたし、当たり前にもズルさもあったり、信じられないくらいやさしさに出会えたり。それは、メンバーと呼ばれる障害がある人たちだけではなくそのご家族、お店に来てくれる近所のばあさまじいさまたちなど、たくさんの人たちと深く付き合う中で見えてきたことでした。

他者と関わる中で自分の思いもよらないことが起こるのは、差異によってもたらされる豊かさなのだと思います。それなのに、とりわけ障害がある人たちやそのご家族が、その差異ゆえに生きづらさを覚えさせられているというザンネンな現実、最初は憤っていました。でも、それでは何にも変わらないし、自分を棚上げしていたような気もします。かなり体躯の大きな、軽度の知的障害と精神障害があるKくんというメンバーがおりました。彼はとても「普通」に憧れていて、当たり前にも恋愛もしたがっていましたが、当時のわたしは彼の望みを十全には叶えられなかったから、殴られも首を絞められもしましたが、今ならばもう少しマ

ジな関わり方ができただろうと悔やみつづけています。自暴自棄になった末に、彼が身体を壊して亡くなってしまってから20年以上になりますが、わたしが障害福祉に従事しつづけている理由の一つが、彼に応答するためなのではないかと思っています。

差異が優劣になったり美醜になったりして、生きづらさになってしまう厳然たる現実の前で、ただ「一緒に」憤って見せたとして、そんな理不尽の「根拠」とされるこの世の中の価値観の方を変えられなければ、彼に応答できないのではないかと考えるようになります。

就職してからグッと物語に触れる機会は減りましたが、相変わらず隙を見つけてはすがり続けてはいました。ジム・ジャームツシュやヴィム・ヴェンダース、アッバス・キアロスタミにモフセン・マフマルバフ、是枝裕和に鈴木志保、岡田利規や関美能留という、さまざまな創り手のおかげで、死ぬのは怖いけれど、「このわたし」というものへの執着が緩んできたというか、他者との関係のなかにこそ「わたし」というものが在るという「自我が拡張していくようなイメージ」が持っていることにより、少しは楽になったような気がします。

主人であるわたしたちの家を壊すには

その代わり、「関係にこそある」と考えるようになった「障害」について、その関係性の一端でもある自分が何とかしなくてはという思いは強まっていき、「死の恐怖」よりも差異による生きづらさを変容しうる作品を探すようになっていました。だからこそ「カタルシス」をもたらす作品を目の敵のようにしていたのかもしれませんが。笑ったり泣いたりしてスッキリするのもかもしれないけれど、カタルシスを目的として、消費されるべくして作られたものには既存の価値観を揺さぶる力は宿りにくい。「壮絶人生自叙伝」的なドキュメンタリーも、テーマパークのアトラクションと同じように消費され飽きられ忘れ去られていく。「感動ポルノ」なんて言い方もありましたが、まさしくそういうものです。そのような他者消費/収奪のようなものがいくら溢れても、社会の価値観は変わらないどころか、より一層、維持され助長さえされるのではないかと思っていたのです。

学生時代に栗原彬さんの政治社会学というゼミで読んだ本の中に出てきた、オードリー・ロードの言葉を思い出します。「主人の道具はけっして主人の家を解体することはない(中略)その道具は、主人が参加している

鈴木励滋(生活介護事業所従事者/演劇ライター)

1973年3群馬県高崎市生まれ。97年から勤めていた生活介護事業所「カブカブ」を2024年度末に離れて、次の場の準備をしている。演劇ライターとしては、劇団のツアーパンフレット、インタビュー記事、演劇誌等への劇評などを執筆。「障害×アート」の分野でも書籍に多数寄稿。師匠の栗原彬(政治社会学)との対談が「ソーシャルアート 障害のある人とアートで社会を変える」(学芸出版社、2016年)に掲載。2022年からは、体奏家の新井英夫や板坂記代子らと、ファシリテーターやコーディネーターの養成に取り組み、自らもコーディネーターとして、これまで十数ヶ所の障害福祉事業所でアーティストによるワークショップを実施してきた。



ゲームのなかで、一時的に主人を負かすのに役立つかもしれない。しかし、私たちが本物の変革を起こすには、何の役にも立たないのだ。自らを「ブラック、レズビアン、母、闘士、詩人」と称する彼女の言うように、本物の変革を願いつつ、「差別」とか「共生」とかゼミで学びながら、自分には何ができるか探っていました。「障害×アート」に携わるようになって、美術史やファッション誌でいくら位置づけられたり一時的に主流派(主人/マジョリティ)からの関心を得られたりしても、「それは消費されるだけではないか」と極端な発言をしてきた背景には、学生時代からのそんな志向性があります。

先達(せんだつ)から教わったこと

想いの余りに肩肘を張り、凝り固まっていたわたしをほぐしてくれたのは、2011年から隔月で10年以上もワークショップでお世話になった新井英夫さんたちとの経験だったように思います。

新井さんの師匠である野口三千三の「豊かさとは「ちょっと・すこし・わづか・ほのか・ささやか・こまやか……」というようなことを「さやか」に感ずる能力から生まれる」という言葉の通り、メンバーさんたちの見逃されてきたかけがえのなさをたくさん教えてもらいました。これは同様に長年一緒にいたミロコマチコさんやアサダワタルさんのワークショップにも通底していました。

さらにそれらは、栗原さんから受け継いだ思想にもつながっていました。高度経済成長期に人々が信じ込もうとしていた価値観「最大多数の最大幸福」には「やむをえない犠牲者」が生じ、それに対する水俣からの異議申し立てがあつたわけですが、「犠牲者」には損害賠償で済ませるしかないというエコノミーの原則に対して、「犠牲者」などという一般名詞で括られえない「代替不可能な存在」「かけがえのない生命」があると水俣病者たちが主張していたと栗原さんは見ていました。「障害者」という一般名詞では括れない、固有名を持ったメンバーたち一人ひとりのささやかでかすかだけれど確かにある代替不可能なところを、さやかに感受する力を育む新井さんたちのワークショップと、その思想は響き合っています。2022年から三年に渡り、ALS(筋萎縮性側索硬化症)を罹患した新井さんたちと、彼らのワークショップの極意を伝える講座を開催させていただきました。ある施設での最後のワークショップの場でのことです。ワークショップに興じる人々の輪を、お構いなしに縦断するように部屋を往

復しつづける女性がありました。ちょっと一息の休憩をとったとき、それまで受講生のファシリテートを見守っていた新井さんの車椅子が、彼女の軌道にすうっと進みました。どうなることかとわたしは息を呑んでいると、当然そのことに気づいた彼女は軽やかに新井さんを迂回しました。その様子を察知した別の人も、同じように彼女の軌道にたたずみます。ペースを変えずにひらりひらりと人々を避けつつ彼女は往復を続けます。ふとその顔に目をやると、ずっと無表情に見えていた彼女は、身をかす瞬間にニヤリとしていたのです。

講座の振り返りでこの場面について新井さんは「彼女をノイズにしたいなかった」と言いました。新井さんの働きかけで、それまで「邪魔者」に見えていたかもしれない彼女がそこに居たからこそその美しさにわたしも出会えたのです。

ワークショップが切り拓く未来

「あなたに居てもらわないと困る」という呼びかけを、きれいごとでなく、もちろん同情や憐みでもなく、心底から発せるためには、こういう身振りができてこそだと強く心に残ったシーンです。このような美しさをひとつでも多く見たいし、見せたいとあらためて思いました。生きづらさを抱えたまま亡くなってしまった彼らへの応答としても、今その真っ只中にいる誰かの生きづらさを緩めていくためにも。

わたしは自分自身が誰かの思想や誰かの作品に救われたような体験を、一人でも多くの人にしてほしいと願っていて、それが批評を書いたりアーティストによるワークショップをコーディネートしたりする際の動機となっています。ワークショップを依頼するアーティストにも「あなたたちのアートで、今の社会からは排除されかねない人々を肯定できますか?」と問うているつもりでいますし、アートにはそれだけの力があると信じています。それゆえ、世界の見え方を転換しうる創り手を探しつづけてきたし、そう思える人たちにワークショップの依頼をしてきたのです。Kくんには見せてあげられなかった美しさに、もとよりこの世界は満たされていたということ、一人でも多くの人と分かち合いたくて、これからも劇場に足を運び、人と人をつないでいくことでしょう。傍らには彼らが居て、わたしも死ぬのが怖くなくなっているとよいなあ……そんな未来を思い描きながら。

Q & A

どうやってはじめる、なにからはじめる？

このQ&Aは、劇つく2025のイベントでの質疑応答、アンケートの回答、専門家や登壇して下さったゲストの意見などをもとにして作成しました。これからプログラムを企画してみたいという方は、ぜひ参考にしてみてください。



Q 障害のある人とアート活動をしてみたいけれど、障害のある人を支援する知識がないので不安です。

A 障害のある人とアート活動をする際に必要なのは、「障害の専門家になること」ではなく、「いっしょにやり方を探す姿勢」です。たとえば脳性麻痺のある方にギターを教える場合、ギターの専門家である先生が、当事者ご本人や、その方をよく知る介助者・保護者と相談しながら、姿勢のとり方や道具の持ち方、すすめるペースなどをいっしょに工夫していきます。「その人にとってどんな環境なら参加しやすいか」を対話を通して理解し、必要なサポートをいっしょに決めていくことが重要です。

Q 本人にはアート作品をつくっている意識がないのに、それをアートとして切り出しているのでしょうか？

A 難しい問題だと思いますが、例えばアート作品として展示したいという場合、ご本人にしっかりと説明することが大前提だと思います。ただし、その人の幸せにつながると言えない場合は、いたづらに切り出さなくてもよいと思います。

Q そもそも企画者である自分自身が身体表現や舞台発表にハードルを感じます。それでも楽しめるようなプログラムはありますか？

A 必ずしも演技をしたりダンスをしたり、発表を目指すようなプログラムばかりではありません。しずかにひとりひとりの身体の違いをじっくり確かめて、場と時間を味わうようなプログラムや、「フォーラムシアター」や「ロールプレイ」など、ある社会課題をお芝居で演じてみることで見つめ直して見るような手法もあります。さまざまなプログラムをまずはご自身が体験してみてください。P.34 からさまざまな目的や手法で実践されている例をご紹介しますので、参考にしてください。

※本プログラムを監修した鈴木励滋さんが執筆された「ザンネンなわたしたちの世界を変えるための6つの試み 障害福祉でのワークショップ実践」も是非ご参照ください。



Q 本人はワークショップや公演に参加したいけれど、ご家族にためらいがある場合、どうしたらいいですか？

A 基本的には本人の希望や意志を尊重することの大切さを、日頃からご家族とコミュニケーションを取る中ですり合わせができると良いと思います。例えば、イベントや行事のときにご家族のご意向とご本人の意向がすれ違ってしまいう場合もおこり得ます。できれば本人とご家族といっしょに話し合いの場所を設け、どうするのがお互いに幸せな結果になるか結論を出せるとよいですね。



Q 自分が働いている劇場で障害のある人もない人も一緒に楽しめるイベントを企画したいです。障害のある人へのサポートをしたことがないので、何を参考にすればいいですか？

A さまざまな参考資料がインターネット上にも出ていますし書籍もあります。字幕や音声ガイド、手話通訳などの鑑賞サポートだけではなく、リラックスパフォーマンスなどの方法が注目を集めています。これをやればOKという正解のあるものではありません。「自分の企画は誰に届けたいのか」「誰には届けられていないのか」ということを企画者自身が考える必要があります。その上で当事者に意見を求めながら、企画チーム全体で考えていくのが良いのではないのでしょうか。



#劇場・企画制作者編

Q 障害のある人も参加できるイベントを企画したいのですが、地域の障害当事者や当事者団体とつながることができません。どうすればいいのでしょうか？

A イベントを開催する地域の当事者団体の方にご案内したり、障害当事者の方がご覧になるWEBメディアやコミュニティなどに企画趣旨を丁寧に説明した上で、相談に行ってみるのが良いのではないのでしょうか。情報提供先としては各地に整備されている「自立支援協議会」や「基幹相談支援センター」があります。また全国に設置された「障害者芸術文化活動支援センター」に相談するのもよいでしょう。

※自立支援協議会
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/service/kyougikai.html#

※基幹相談支援センター
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/service/kikan.html

※障害者芸術文化活動普及支援事業(厚生労働省)
<https://arts.mhlw.go.jp/>



#福祉事業所編

Q 福祉事業所に通うメンバーの方それぞれが楽しめる表現のプログラムを考えたいです。メンバーにあった企画はどうすれば実現できますか？

A メンバーさんたちの「好きなこと」とか「やってみたいこと」とか「ゆめ」を集めることから始めるとよいと思います。と同時に、いろんな経験が少なく夢や希望の選択肢がまだまだあまりない人もいるでしょう。さまざまな表現と出会う機会をつくり、その際の些細な反応も見逃さなければ、そこから新たな選択肢もできるはず。それらの「実現」に合ったアーティストを探しましょう。叶えられそうもない望みほど、演劇などのフィクションがお役に立てることもあります。

#学校編

Q さまざまな障害のある子どもたちとともに授業をつくるのは難しそうです。どんな授業をやったらいいのでしょうか？

A 授業ではなく、休み時間にみんながいっしょに楽しめる遊びを仕掛け、すこしずつ心理的なハードルを取り払うのもいいかもしれません。また、アーティストを招くなど、普段と違う人と出会えることで、子どもたち同士の自然な交流が生まれることがあります。いずれにしても、子どもたちや先生方の状況に合わせて、時間の構成を変えたり、グループに分けたりと、毎回子どもたちや先生方と話し合いをしながら調整していくのがよさそうです。障害のある人自身や、その保護者、支援にかかわる人たちから学ぶ姿勢も大切です。

Q 福祉事業所にアーティストを呼びたいけど、アーティストと繋がりがありません。どうしたらいいですか？

A まずはアーティストの展示会や演奏、パフォーマンスなどをみにいくところからはじめてはいかがでしょうか。近くの美術館や劇場などの文化施設の催しに訪れてみたり、WEBメディアなどでも、福祉施設とのコラボレーションに積極的なアーティストの記事などが見つかると思います。P.47に挙げた相談先もご参考にしてください。

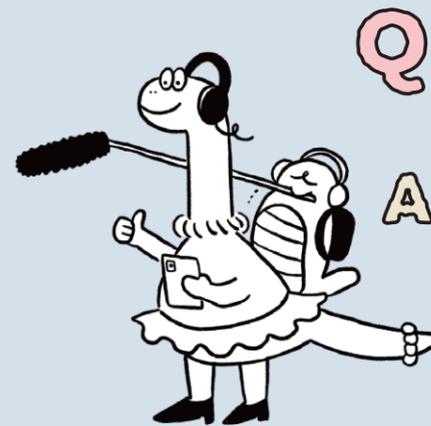
Q 身体表現の企画をしてみたいけれど、そもそも職員にも身体を動かしたり、演劇やダンスという抵抗があるスタッフもいます。何からはじめればいいのでしょうか？

A コーディネーターに相談するのがよいと思いますが、あちこちで開催されているワークショップを覗きに行ってみてはいかがでしょう。障害がある人ではなく子どもや高齢者が対象のものでも構わないので、自分がやってみたいと思えるワークショップを見つけて、そのファシリテーターの方に声をかけてみると、何かが始まるような気がします。

Q 学校の授業にアーティストを呼びたいけど、どうしたらいいですか？

A 学校の先生である場合、コーディネート機関に連絡してみてください。学校の先生がアーティストと直接交渉し、音楽の授業や総合学習の時間を活用してアーティストを呼ぶこともできます。PTAの学習会や講演会なども活用できそうです。

※首都圏の場合は「NPO 法人芸術家と子どもたち」というコーディネート機関があります。事例集のP.41を参照してみてください。



Q インクルーシブ教育と謳いながら、実際はただ場所を一緒にしているだけだったり、副学籍の子どもがいつまでもお客さんのような扱いだったりすることがあります。どうしたら日常をともにする仲間になれるか？

A 本来のインクルーシブ教育は、地域の多様な子どもたちとともに過ごすことと、それぞれの子にあった支援や学習計画が両方実現できることです。焦って形だけ整えても本人にとってつらいだけということもあります。その子にとって必要な学びを整えることを忘れずに、ともに過ごす時間を増やし、少しずつ理解をひろげていくステップが必要です。

Q 障害のある子どもが通常の学校で一緒に学ぶと、学びの質が落ちてしまいそうで心配です。そもそもなぜ多様な子どもたちとともに学ぶ必要があるのですか？

A 学びとはなにか、と立ち返って考えることが必要なかもしれません。多様な人が生きるのが社会です。画一的な教育は、すべての子どもたちの多様な可能性を奪ってしまうことにつながります。教室の中に多様な他者がいることこそが、すべての子どもたちにとって、良質な学びの環境といえるのではないのでしょうか。

Q 限られた授業時間や制度の中で、インクルーシブな授業をつくるよい実践例はありますか？

A 国立特別支援教育総合研究所が事例をデータベース化しているほか、各自治体や教育委員会でも事例集を独自に作っている場合もあります。また、インクルーシブなプログラムについて考える民間団体もありますので、問い合わせてみるとよいかもしれません。

※国立特別支援教育総合研究所が事例をデータベース化しています。
インクルーシブ教育システム構築支援データベース <https://inclusive.nise.go.jp/>

※P.12-13のプログラムレポートでコメンテーターとして紹介している野口晃菜さんが運営にかかわる「一般社団法人 UNIVA」では、学校や自治体、国と共同でインクルーシブ教育の具体的な知見を蓄積し、すぐに授業につかえる指導要領なども作成しています。

Q 多様な子どもたちが混ざり合う時間をつくりたいと思っていますが、先生や保護者に理解が広がらず、苦戦しています。どうしたらいいですか？

A 「道徳」「倫理」的に「すべきこと」としてとらえていると無理が出ます。あなた自身が、混ざり合うことで豊かで楽しい気持ちになれた経験について、伝えられるとよいのではないのでしょうか。まずはお互いに無理のない形で、ともに過ごす時間をつくっていくことから始めてみるとよいかもしれません。



Q 自分の子どもがワークショップに参加しなくて不安です。どうしたらいいですか？

A ワークショップは強制するものではありません。参加したい子が参加したいタイミングで参加できる状態にすることで、多くの子どもたちにとって心理的に安全な場所になるということもあります。参加してもしなくても、不安に思うことはありません。



2021

2021年度は山川陸さん(建築家)をディレクターに迎え、主にセノグラフィーの視点から検証を重ねることを中心に活動。パートナーに奈良県の福祉施設「たんぼの家」を、ゲストクリエイターに板坂留五さん(建築家)・渡辺瑞帆さん(セノグラファー)・梅原徹さん(美術家/音楽家)を迎え実施しました。



クリエイターチーム

板坂留五
梅原徹
渡辺瑞帆

トライアル実施パートナー

【たんぼの家】佐藤拓道、中島香織、大井卓也
【生活介護事業所 ぬかつくるとこ】丹正和臣・湯月洋志
【社会福祉法人 愛成会】青木信(指定障害者支援施設メイプルガーデン)、玉村明日香
【社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房】小西康文、桐葉朋子、桐葉昌大
【社会福祉法人 安積愛育園】小林竜也(はじまりの美術館)、折笠弘海、佐藤雅俊(多機能支援センター ピーポ)

制作・運営・広報

【報告書編集】春口滉平 【報告書デザイン】網島卓也
【企画・制作】THEATRE for ALL(株式会社 precog)
【プロデューサー】金森香
【ディレクター】山川陸(建築家・一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL アソシエイツ)
【プロジェクトマネジメント】兵藤菜衣・林芽生・黒木優花
【主催】一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL

2022

「知的・発達障害のある方を鑑賞者として想定した作品とはどういったものであるのか?」という問いのもと、蓮沼執太さん(音楽家)と水尻自子さん(映像作家)が福祉施設でのリサーチをもとに、オリジナルアニメーションを作成。梅原徹さん(音楽家)がワークショップの企画を担当しました。2022年度は福祉施設など合計6ヶ所での上映会やワークショップを実施し、「THEATRE for ALL」での配信を行なっています。



クリエイターチーム

【音楽】蓮沼執太
【映像】水尻自子
【音響・コミュニケーションプログラム】梅原徹
【協力】社会福祉法人印旛福祉会 いんば学舎・陣屋

トライアル実施パートナー

社会福祉法人印旛福祉会
いんば学舎・陣屋(千葉)
社会福祉法人わたぼうしの会
たんぼの家アートセンターHANA(奈良)
ほっちのロッジお出かけDAY!(長野)
社会福祉法人愛成会 メイプルガーデン(東京)
まるっとみんなで映画祭2022 in NASU(栃木)
NPO法人リベルテ(長野)

制作・運営・広報

【助成】公益財団法人森村豊明会 【事業アドバイザー】長津結一郎
【企画アドバイザー】山川陸 【コーディネーター・報告書編集】米津いつか
【報告書デザイン】網島卓也
【プロジェクトマネジメント】和久井碧、林芽生
【プロデューサー】金森香
【企画・制作】THEATRE for ALL(株式会社 precog)
【主催】一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL

2023

2023年度は2022年度に制作したアニメーション「PAPER?/かみ?」をよりよいかたちで鑑賞するためのワークショップの開発に、佐藤拓道さん(たんぼの家アートセンターHANA)、栗田結夏さん(ワークショップデザイナー)とともに取り組みました。そうして開発した「音で遊べるワークショップ型上映会」を、福祉施設3箇所に加え、地域のユニバーサル映画祭、放課後デイサービス、学童などで開催しました。



ゲスト講師

佐藤拓道(たんぼの家アートセンターHANA)副施設長
栗田結夏(ワークショップデザイナー)

トライアル実施パートナー

【社会福祉法人育護会 浅間学園】原田修(施設長)、川井孝幸
【軽井沢町保健福祉複合施設 木もれ陽の里】
【軽井沢町保健福祉課 福祉係】
【社会福祉法人愛泉会 軽井沢治育園】井出和美(施設長)、川村俊介、阿部怜奈
【軽井沢町社会福祉協議会 地域活動支援センター】塩川早人
【社会福祉法人みぬま福祉会 川口太陽の家】小嶋芳維

制作・運営・広報

【機材協力】社会福祉法人育護会 浅間学園
【ファシリテーション協力・楽器提供・アドバイザー】佃梓 / 馮馳(NPO法人リベルテ)
【作品提供協力】別府短編映画祭
【記録映像・写真】村上邦久 / たけなかいこ(|+|=| STICK AND LADDER S.A.)、軽井澤二十四節氣
【報告書編集】春口滉平 【報告書デザイン】網島卓也
【企画・制作・運営】THEATRE for ALL(株式会社 precog) 【企画ディレクター】中村茜
【プロデューサー】星野麻子、兵藤菜衣 【プロジェクトマネジメント】林芽生
文化庁令和6年度「文化庁障害者による文化芸術活動推進事業」
【主催】文化庁、一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL
【企画】一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL

2024

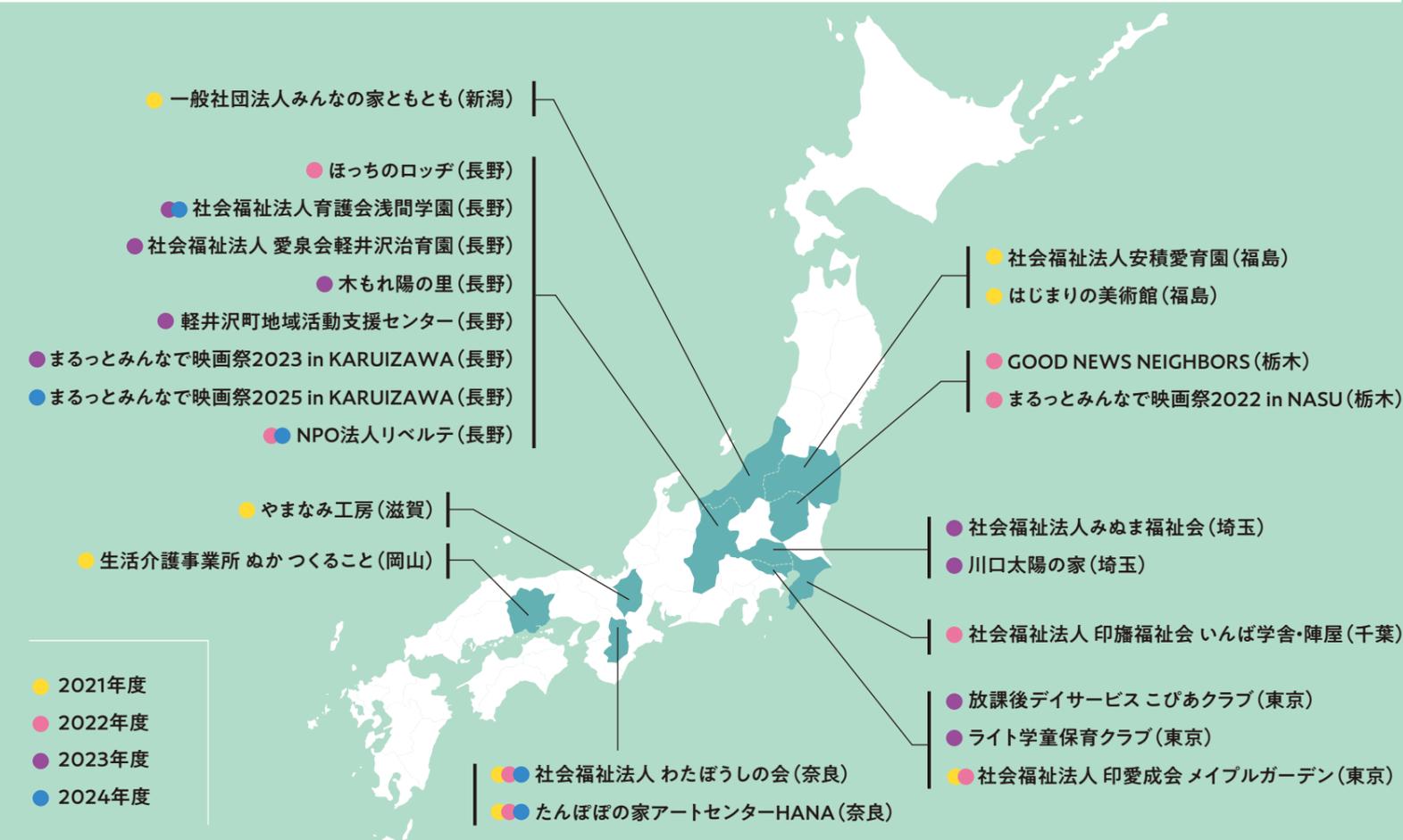
2024年度は、長野県で身体表現を軸に、さまざまな実践者が「地域の劇場」「教育の現場」「福祉施設」で創作や発表、鑑賞などに参加するプログラムをどのように設計していけるのかを考えるワークショップ型の講座を開催。その成果とポイントをまとめるとともに、全国の表現と福祉の事例を取材して掲載する「劇つく本」を製作しました。

ゲスト講師

Ninian Perry(Paragon クリエイティブ・ディレクター兼 CEO)
アライカリュウ 晶子(Paragon ダンス・プラクティショナー)
恵志美奈子(世田谷パブリックシアター 劇場部 創造環境開発担当)
森田かずよ(俳優・ダンサー)
金箱淳一(楽器インターフェース研究者)
伊達麻衣子&竹田栄次(コンテンポラリーダンサー)
中西麻友(NPO法人芸術家と子どもたち 事務局長)
塩入健(伊那養護学校 特別支援教育コーディネーター)
野口晃菜(インクルージョン研究者)
佐藤拓道、杉田夏希、行方雄大、前田考美、下津 圭太郎(たんぼの家)
藤原佳奈(戯曲作家・演出家)
原田修(社会福祉法人育護会 浅間学園施設長)

制作・運営・広報

【助成】公益財団法人森村豊明会
【後援】長野県教育委員会 / 上田市 / 佐久市 / 佐久市 教育委員会
【企画アドバイザー】鈴木励滋 【主催】一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL
【企画・制作】THEATRE for ALL(株式会社 precog)
【企画ディレクション・プロデューサー】篠田菜 【企画運営パートナー】ざこうじるい
【ブックレット編集】篠田菜、松本綾香、ざこうじるい 【デザイン】フィールドデザイン
【執筆】ざこうじるい、篠田菜、松本綾香、金森香
【寄稿】鈴木励滋、野村政之、森田かずよ
【取材協力】秋山紅葉(やどかりハウス)、鮎川理恵、恵志美奈子、遠藤暁子、佐久間新、佐藤拓道、佐藤有希、下山久、関孝之、武田和恵、武田奈都子・藤原顕太(クロスプレイ東松山)、中島裕子(就労継続支援B型 Base Camp)、中西麻友、文、森田かずよ、渡邊和幸(長野県教育委員会)、The Nyamshan house
【協力】信州アーツカウンシル



- 2021年度
- 2022年度
- 2023年度
- 2024年度

おわりに

この冊子の企画・編集に関わったメンバーの編集後記です。

篠田栞



THEATRE for ALL 編集長

奈良県在住。広告代理店等を経て独立、2020年に precog の THEATRE for ALL の立ち上げに参画。舞台のアクセシビリティ制作に関わる。個人では芸術文化に加え、伝統文化、東洋医学などのジャンルでの取材、コピーライティングや編集執筆などをおこなう。

イベントや公演のアクセシビリティに関わる仕事をしている。専門性や経験の浅さに加え、正解がなく、不十分で、お金もない世界でもがきながら、同僚たちとやれることを模索してきたが、「私はどうしてこういう事業に関わっていたいのだろう?」と問いながら、この「劇つく」を走らせてきた1年だった。思えば身近に子どもの頃から障害のある友人や身内がいた。人と暮らすのが大の苦手な私が、唯一、快適に、社宅でふたり暮らししたのは、知的障害と精神障害のある人だったし、音楽家だった父も生きづらい人だった。物語や芸術文化を通じた対話は、「自分と違う世界をもつ人」「綺麗ごとでは済まないような具体的な生活世界のこと」「誰を責めていいのかわからない理不尽」「見えづらい本当のこと」に向き合ったり、それらと和解するための時間をくれることがある。ルールや制度だけではどうしようもない、人間でいるからこそおこりうることに向き合っていくために、福祉や芸術文化が与えてくれる視点があるのかもしれないと感じる。この事業に向き合って、改めてそんなことを思った。

ざこうじるい



フリーライター

長野県在住。WEBメディアでの企画・執筆の他、フィクション・エッセイも。数字やデータでは語りきれない人間の生き様や豊かさを描くことで、誰もが社会的に健康でいられる社会を目指す。重度心身障害児含む4児の母。

私は4人の子どもの母親で、フリーライターの仕事をしている。フリーランスというと自由なイメージがあるかもしれないが、要は組織に所属することがいろんな理由で困難だったということでもある。10代でメンタルを病んだ私の社会人生活は全然思い通りではなかったし、憧れだった子育ては想像を超えることの連続だった。3番目の次女は、生まれつき体の自由度がほぼなくて、目も見えない。言葉話すこともできない。にこにこしたり泣いたりして快・不快を表現するのは赤ちゃんといっしょで、生活の全てに誰かの介助が必要だった。でも次女が生まれたことによって、意味とか価値とかそういうことから少し解き放たれて、ただそこに存在することの尊さを毎日身体で感じるようになった。人生は雑多な出会いに満ちている。ある人の雑多な出会いがそのままその人をつくっていくとも言える。少なくとも文化芸術は、その出会いを少し後押ししてくれる。答えがあるものもないものも、その出会いを通じて開示していくことが、ある意味で一つの答えになるのかもしれない。

松本綾香



ライター・編集者

千葉県在住。会社員を経験した後、2017年からフリーランスに。現在は主に“人の表現”への関心を軸に、ウェブメディアの運営、記事の企画・執筆・編集、地域芸術祭の広報などに携わる。

つくること、鑑賞することが好きで、気づけば芸術や表現活動が身近にあった。福祉や多様性といったテーマに関心を持ったのは、幼い頃から障害のある人が身近にいたことが関係していると思う。数年前、福祉施設で利用者の方が“表現する”(アートと呼ばれることもある)姿に出会った。見入ってしまうような作品をつくる人、何が何だかわからない表現をする人、皆それぞれ自分の好きにしているだけのそのようなその光景に衝撃を受けた。こんなふうに自分をひらいて、作画的にならないで、のびのびと生きられたら――。以降、より一層“人の表現”を気にかけるようになった。10年弱、人の話をきく仕事をしてきた中で、アートとか表現とか綺麗な言葉では括れないリアリティが日常にはあるのだと実感する機会も多かった。障害の有無、強者・弱者、支援者・被支援者など、いろいろな立場や境界を一旦横に置いてその場にただ集中する。すると新しい景色が、かわりが、ひらかれていく。私は、芸術や表現活動を通してそんな感覚に出会うことがある。幸いこの冊子をつくる過程でも、私は度々そんな感覚に出くわした。この冊子を手にとった方にも、何かしら心が動く感覚を届けられたらと思っている。